川柳雜誌

★兵士は戰線に！　我等は銃後に!!　（國民精神總動員）

麻生路郎★編輯

13/8

175

第十五卷　第八號

每月十五日發行

川柳雜誌社發行

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十六年八月十五日發行　第十五卷第八號（卷一四十五日發行）

のために

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町　和田卯助商店

片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

楢林醫學博士　推奨
片瀬醫學博士　監査

戰線へ

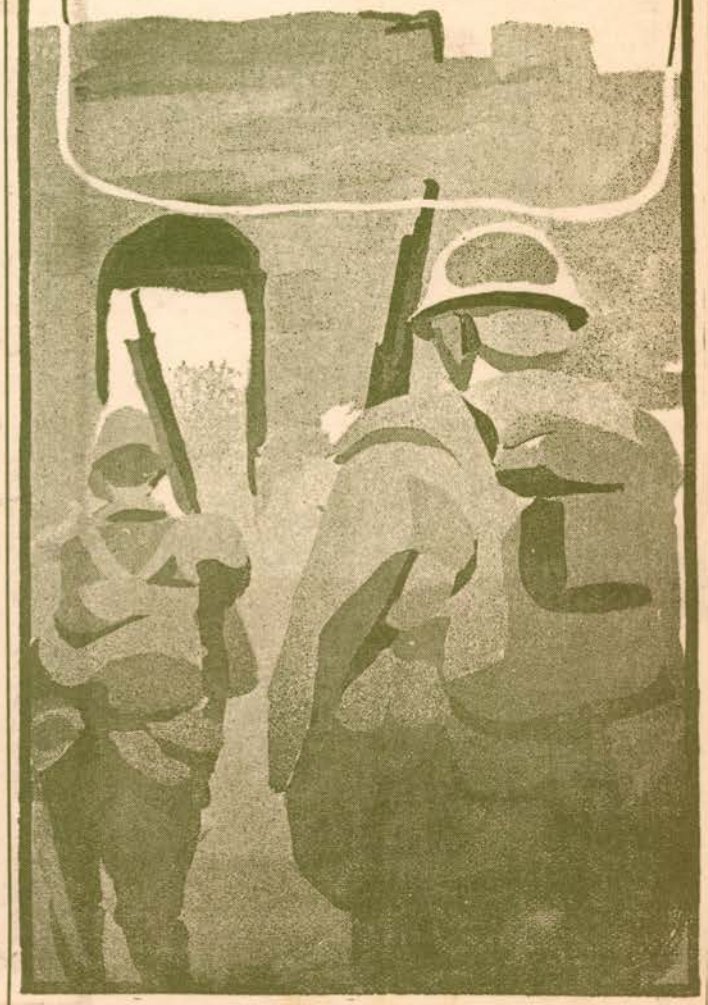
慰問品

猛暑の戰線に献身活躍せらるゝ皇軍勇士の御辛苦に對し、感謝の赤誠を籠めて慰問品をお送り致しませう

適切の品・種々取揃

二階・慰問品賣場

大阪 高麗橋　三越



川柳雜誌

第十五卷　第八號

川柳雜誌　175號目次

表紙……柴谷宰二郎

船に乘つた話……（一）
急がない旅ならば……高田義一郎……（二）
大は秩父丸……川上三太郎……（二）
人生の縮圖……前田五健……（三）
大西洋を二回……淺田一……（三）
宇治の涼み船……高橋かほる……（三）
荷足こいふ舟で……村田周魚……（三）
テーブも國策線へ……須崎豆秋……（三）
似非洋行……奥村丹路……（三）
川柳評釋　都會風景……麻生路郎……（六）
空のスポーツ……グライダー見學川柳會……（四）
詩人複眼……高鷲亞鈍……（三）
武玉川三篇研究（二〇）……梅本秋の屋　森東魚……（八）
二〇一號室斷片……蛭子省二……（一〇）
縣賞川柳「洋裝」發表……不朽洞主人……（一五）
川雜案内……（六）
川柳街雜筆……（一三）
生蕃三題……庄萬よし……（一三）
一睡前に……惠美酒……（一三）
笑ひを失つた子規……山本葉光……（一三）
一萬圓……酒井斗風……（一三）
不朽洞句抄……麻生路郎……（一）
近作柳樽……麻生路郎選……（四）
川柳塔……諸家……（一〇）
一路集　記者……大島濤明選……（一六）
愛人……水谷鮎美選……（一六）
各地柳壇……（一八）
飛燕往來……諸家……（一五）
川柳解題と例句……路郎編……（六）
川柳忌・戰死柳友慰靈祭（豫告）……（一三）
後記……（表三）
川・協・の・頁
久良伎翁　古稀祝賀記念品贈呈に就て……（一六）
川柳・協……（一七）
人・索・描……（一六）
（三〇）池田可寄君　（三一）植山九天君　（三二）楊柳夢君
柳界展望……（一三）

不朽洞句抄

麻生路郎

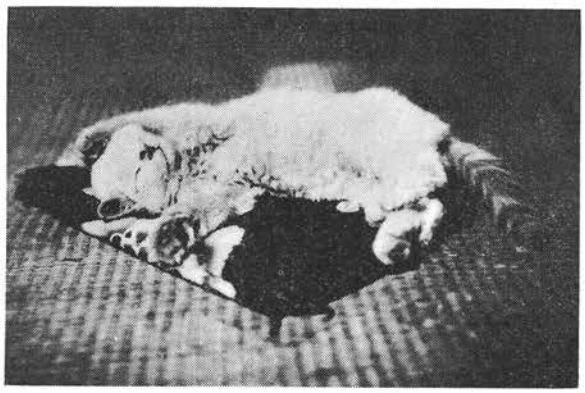
公憤を棄てよと
資本主義の父

不肖の子へ
儲けたことは隱しとき

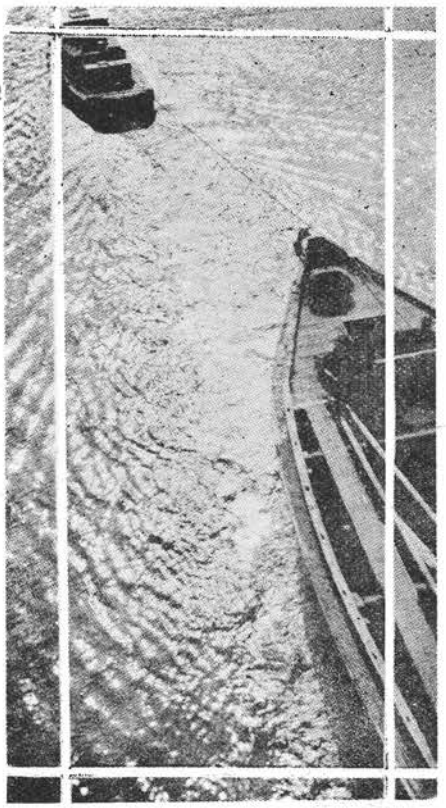
財産は減らず倶樂部の幹事也
お互ひの女房の話だけは避け

天聲人語も　苦し社のみそ

蒙疆張家口にゐる柳路君から愛猫の寫眞を送つてくれた。事變を餘所にふんぞりかへつて畫寢をしてゐるさまが面憎いまでに悠々としてゐる無闇に昂奮してはいけない事と長期攻戰には、しつかりした覺悟と、悠々迫まらざる態度を必要とすることを教へて呉れてゐるやうだ。（路）



私の愛猫　（柳路撮影）



船に乘つた話

★高田義一郎・川上三太郎・前田五健・淺田一・高橋かほる・村田周魚・須崎豆秋・奥村丹路

銷夏の讀物として八氏を煩はしました。一讀涼風類をうつの感があります。（編輯局）

急がない旅ならば

高田義一郎

○

船には弱い癖に、何故か船に乘るのが好きで、島へ渡つて見ることに、多大の興味を持つてゐる。佐渡へも行つたことがある。隱岐へ行きたいのは、久しい以前からの念願ながら遺憾ながら、未だ行つてゐない。しかし伊豆の大島は近いので、已に前後五度も行つてゐる。

樺太へ行く時にも、津輕海峽の往復と宗谷海峽との往復をしたが、この航海には之といふ印象も殘つてゐない。同じ鐵道省の連絡船ながら、滿洲行の時の朝鮮海峽のものや、大連から門司までの方が、遙に思出が多い近距離ではあるが、未だ宮津まで鐵道の開通しなかつた時代（明治四十五年）に、新舞鶴から宮津までの連絡船の方が良かつた。鹿兒島から櫻島までのモーター・ボートや、今問題の香港から九龍までのサンパン等も、自分にとつては印象が深い。大阪から別府までの、大阪商船の遊覽船は、一千噸の小型であつて、丁度歐洲航路の一萬噸に、一ヶ月半の長い航海（ロンドン神戸間）を終つたばかりに乘つた所から、非常に狹苦しいといふ感じはしたが、流石に遊覽船だけに乘心持がよかつたのは、今尙ほ嬉しく思つてゐる。

○

將來の日本人は、航海をせずには濟まされまいと思ふので、長崎、上海間に近海郵船の航路が開かれた頃から、子供達を之に乘せて、上海へつれて行つてやりたいと思ひながら、つい實行が遲れてゐる中に、滿洲事變となり、上海事變が起つて、行つても不愉快な目に逢ひそうな懸念が出來て、そのまゝ今日に及んでしまつたのは殘念でならない。

○

次男を農林省の水產講習所漁撈科に入れた。彼は今三年生で現に暑中休中、四十日間の漁業實習航海に出てゐる。明後年三月卒業の後には、更に遠洋漁業科に向ふ豫定であるから、前後六ヶ年の學科を終れば、彼は直に南氷洋へ捕鯨の爲に向ふことにならう。若し彼が捕鯨船の幹部となつた曉に、自分が未だ生きてゐたならば、今生の思ひ出に一度は同航して、捕鯨の壯觀を見せて貰ひたいと思つてゐる

○

ロンドンに居た日、一日を費してネルソン提督がナポレオン一世をトラフアルガーで破つたといふ軍艦が、昔のまゝの形で保存されてゐるのを見に行つた先年、横須賀で東郷元帥の旗艦であつた三笠艦が、それと同じ樣にしてあるのも見に行つた。時の遠近もあり、船の大小もあり、外國と日本との相違もあるので、同じく祖國を救つた偉大なる功績を示すものながら、ネルソンの方はあまり印象に遺つてゐない。

○

同じ航路の船であつても、乘客の如何で忽ち一變してしまうことはいふまでもないが、それを如實に見せつけられて、驚異の眼を見張つたのは、東京灣汽船會社の伊豆大島行の船である今は一千何百噸とかの葵丸といふ船や菊丸といふ船等であるが

書け一奇に
全國便箋

あれは松本喜代子といふ若い女學生が、三原山の墳火口へ飛込む自殺を流行させてくれたお蔭で、三原山へお客が押すな〳〵の盛況を與へてくれた結果である。つい十數年前の昭和の初年か大正の末年かに、自分が大島へ行つた最初の時には、昨日まで荷物を運んでゐたらしい傳馬船の小さな奴、しかもその窓一つない船倉は、前に積んでゐた魚の臭氣でたまらない上に、側壁には古い幔幕を張り、床にはゴザを敷いてあつたのみである旅客はそのゴザの上に、三三五五、魚河岸のまぐろの樣に横はつて、船足の遲いのが、ノソリ〳〵と長時間を費して、向へ行きつくまで、ジッと辛棒を餘儀なくさせられたものである。自分が松本喜代子といふ顏を見たこともない女學生の名を、ハッキリ記憶してゐるのは、そのボロ船を今日の如く改めさせてくれた彼女の功績を忘れることが出來ないからである。

○

船に醉ふのは、勿論、船體の動搖によるが、動搖といつても左右の搖れはそうこたへない。反之、前後に搖れるのが恐ろしくこたへる。どつちかをロッリングといひ、どつちかをピッチングといつたが、その區別を忘れてしまつた。其上に臭氣の關係が中々大きい。前記の樣な魚の臭氣等があつたりしては、平穩な浪の上でも、忽ちゲーッと來てしまう。船につき物のペンキの臭氣もたまらない。自分等は和船ならば、相當に搖れても平氣だが、ペンキ塗りたての大船となると、忽ちやられる。之は自分ばかりではあるまいと思ふが、それを明記したものに接しないので、いつも不思議に思つてゐる。

○

急がない旅ならば船に限る。汽車は狹苦しくていけない。飛行機や飛行船は、より以上窮屈だらうと想像してゐる。

大は秩父丸

川上三太郎

一、乘つた船、大は秩父丸、小

は井ノ頭のスワン船、
二、行つた所、上海二回、天津大連二回、内地は關門二回、青函十數回（その他河川湖沼は無數）
三、連れた人、男の友達、女の友達、妻、子供。
四、船中話題、ハガキでは書き切れず。

人生の縮圖

前田五健

さあ十年も前でせうか、九州小倉へ野球部理事として出陣、門鐵を破り、八幡製鐵に、ヒドイ目にやられて別府から乘船、風流氣何パーセントの選手連中も甲板で變る風景に喜んで居た時、フト氣付くと元松商の捕手高橋ゴテ君と元北中の捕手山崎オトウ君が見へぬ、覗いて見れば船室で將棋の最中、飛び入りの他のお客さんも、二三撫で斬つて意氣正に揚々の體—やがて老眼鏡のオッサンが失禮ですがと兩君を共に三番立て投げの、フラ〳〵に合せたので、ゴテ、オトウの兩君、早速甲板へ駈け上り「五健さん海はイ、ですな」「さうよ、敗け將棋の頭に船上の風は藥だよ」に一同流石の大船も搖らぐ大笑ひ、ゴテ君、オトウ君、たまらず階段へ向はんとする鼻先へ、老眼鏡のオッサンの頭「この船は狹い」とゴテ君の悲鳴に再び大笑ひ、船の旅は樂しくいつも面白い全く人生の縮圖だとつく〴〵思つた。

太西洋を二回

淺田一

神戸長崎間、長崎上海間、下關釜山間は何れも數回乘つた。之等は大抵寢てゐる間に目的地に着いてしまふ。樺太の敷香から海豹島への航行は愉快であつた。阿呆鳥、オットセーの群々見てゐると全く時の移るのを忘れる。或年の七月沖繩へ行つたが梅雨晴の素晴らしい好天氣で海は靜かだつた。台灣通ひも大きな船で些の不安もない。支那海、印度洋、スエズ運河、地中海を經てマルセーユへ行つた時の四十日以上の船中生活は忘れ難い。太西洋を二回歐より米へと渡たがいつも五万噸の巨船が激浪に翻弄される大荒れだつた。船の嫌ひだつた僕も其頃は無理に甲板を蹌踉と散歩し、食堂で一通り平げる位の修養を積んだ。太平洋の航海は、名の如く大抵靜だ。濠洲、南阿、南米にいつか行つて見たい。

宇治の涼み船

高橋かほる

天保山から何ややかましい雜音の内に乘る船よりも浪を蹴立てるモーターボートよりも一本も木の無い岩を「親に勘當裸岩で御座い」とヨタなじゆんさいな事を云ふ陸前の松島の島廻りをする船よりも水がかゝつてあんまりエー事ない保津川下りの船よりも…紺の明石に白博多の帶に雪駄履きの伯母と玉子の卷きやきにあなごのつけやきで淺酌をしたすだれ下ろして船の内と云ふ宇治の涼み船に乘る方が私の任にある樣に思ひます。

荷足といふ舟で

村田周魚

小さい舟では子供の頃に田舟といふので綾瀨川に遊び、大きいのでは大洋丸で初めての朝鶏の鳴くのを聞いてびつくりした思ひ出があります。最近では昨年の今頃婦人ばかりの信仰團體である如說修行會の先達となつて大川を荷足りといふ舟で俗にいふ川施餓鬼をやりました。巨呂平君から御中元にもらつたボンパンを持ち込み私は前夜物故柳友の俗名雅號を認めた紙片を家内は先祖代々から物故知友の戒名を認めた紙片をそれ〴〵持つて、舟は賑やかに大川の涼風に吹かれ一同南無妙法蓮華經を唱へ乍ら各自の持つた紙片を川に流しながら上流へ上流へと上りました。私は一々柳友の雅號を唱へ冥福を祈りましたが舟に乘つてこんないゝ氣持になつた事はありませんでした。

テープも國策線へ

須崎豆秋

商用で淡路へ行つて歸りに天女丸が洲本を出帆する時、甲板で赤だすきの人と偶然いつしよになり岸壁と船とを五色のテープで彩り感激の渦に卷き込まれたことがあつた。

琵琶湖の湖水めぐりで濱大津を遊覽船が出る時、サービスのテープを投げてくれてさへ、チャンチャラおかしいみたいな中にも出船の氣分を添へて一寸いゝもんである。

この出船を飾るテープも紙節約の國策に應じていよ〳〵姿を消すことになりそうだ。

そうなると、又浪子さんみたいに白いハンカチを振つて別れを惜しむ出船情緒が復活することであろう。

似非洋行

奥村丹路

學生時代華やかなりし頃のお話です。K學院ラガー一行は神戸出帆FOR SANFRANCISCO日枝丸船上に多數の學院ボーイの見送を受て意氣天を衝くものがありました。阜頭と船上とで合唱相和す校歌と應援歌、小旗の波、テープの亂舞同船外人の好奇にかゞやく目、まことに太平洋航路日枝丸出帆風景にふさはしいニギヤカサと哀愁との交響樂です。やがて日枝丸の巨體が靜に岸壁を離れる時讃美歌「また逢ふ日まで」のアワレ深き合唱——港外へ〳〵そして一路サン・フランシスコへ——途中ヨコハマ停泊、——あゝ餘りに近かつた私達の目的地ヨコハマよ。でも目出度く對A學院ラグビー試合に大勝して歸神しました。ちよいとした洋行氣分を味ふために船を利用したと云ふお話。

近作柳樽

麻生路郎選

新開地犬と犬とは仲がよし　兵庫縣　酒井美知夫
恩給に頼り鶏にも頼り　同
古本屋氣の毒そうに買つてくれ　同
原因に口まち〳〵な夏の火事　同

阪神水禍

六麓莊命をおとすことなり　同
來合はした女中の親が釘を打ち　大阪　柳大門
蝶とんで外野は用事更になし　同
一時を過ぎて無錢飲食らしくなり　同
月賦まだ濟まないものも土用干し　同
銃後銃後老も若きも畑の中　奈良縣　嶋田翠峯
來る年も同じ折目の土用干し　同
息の根がいつぺん止る瀧しぶき　同
衝立の裏へ廻れば積み重ね　同
夜か朝か早出の辨當へ蛙鳴く　兵庫縣　田邊由布
飯拔きのランチへ君と僕の醉ひ　同
白粉も附けず隱居の妾で居　同
拍手だけ聞けば大した人氣なり　石川縣　小松　勝山しとし
戰場を思ひなさいと焦げた飯　同
言附けて欲しい氣持も片思ひ　同
勵ましてゐる子へ父の肖像畫　大阪　米谷松太樓
花嫁をもう見に行かぬ嫁き後れ　同
まだ若い父はきたなく貯めて死に　同
その後を語つて舊友擧手の禮　大阪　石田沐天
奸臣の立聞きと知る風が來る　同
人を見て法を說く日の淋しかり　同
容疑者は甞ての陸の王者なり　長野縣　上諏訪　林幹
蠅叩き蠅は捕れずに子を覺し　同
一疋になつた錦魚を五月蠅がり　同
神樣は惡の自由も與へたり　大阪府　川村春月
緞張に惜しやクラブの齒磨粉　同
拾圓の錢を大金とも云はれ　同
ニュース館よく似た顏へハツとする　今治　長野文庫
軍服になれば番頭面でなし　同
老兵の未だ〳〵負けぬきつい文字　同
水銀は騰る勇士へ感謝する　愛媛縣　大洲　米澤曉明
舊友の綽名先立つ寫眞帖　同
眠たさをじつとこらへた平社員　同
萬才へ一つ心の口揃へ　名古屋　鈴木可香
風吹けば吹くで淋しい芒の穗　同
山頂の夜の心の白さなり　同
反省を促す風鈴小さき風鈴　松本　小宮山雅登
繰縱は御主人らしいダツトサン　同
女學生ミリタリズムに下駄の音　同
女房もう欠伸をしてるニュース時　下關　櫻川不水
幾千のテープ優しい戀もあり　同
テープまだ日本と脈を通じてる　同
露次多き街で錦魚屋くたびれる　尼崎　酒井斗風
赤糸のネームのしやつの獨り者　同
こぼれ種主人歸りて花が咲き　青島　正木琴舟
支那人の女給出て來るカフェー殖へ　同
神經衰張の轉地を蛙眠らせず　兵庫縣　鳴尾　北川春巢
國道の木蔭を借りるひやしあめ　同
紫蘇摘んで染つた指をいとしがり　靜岡　乾早智子
百貨店みじめな女になつて出る　同
締め出しを食つて腹立つ暑さなり　大阪　山本葉光
物干があつて二階の夏もよし　同
新聞の見出しも太し幸運兒　下關　多田市多樓
梅雨晴を待つて帽子を買ふときめ　同
取引をして戴きたさなりへへー頓首　大阪　泉流葉
プールより少うし溫い行水し　同
アスファルトあへぐ蹄が印される　西宮　阿萬々的
汽車の窓閉めさゝぬ子へ陽はまとも　同
塗藥して石膏像に異ならず　高松　楊柳夢

濕疹を病みわれ晴雨計になり　同
行水の螢へ坊や來てごらん　大阪　多田一波
口實の夜店をぬけて來たジッヨキ　同
國境の護り冷うなつて死に　廣島　大塚五厘棒
大家族物價騰貴もかみ分ける　同
羞しい事へ代書の太い聲　大阪　野本呑水
七年も前の地圖にて辿つて來　同
冷い茶二人の心結ばれず　布施　福井いづむ
金槌を強くたゝけば手が痺れ　同
行水の父を待つてる冷素麵　石川縣根上　末次掬水
風鈴の涼しさへよる陶枕　同
御用聞き奥まで通る聲を出し　大阪　山川富士
次々へ表彰の額の掛場なし　同
不性髭グラビヤになる占領地　尼崎　山田南濃路
病床の窓附添が髪をすく　同
出征の握手の力信じきり　大阪府　西尾栞
弟の握手に兄の手が痛い　同
ポマードの今日から用のない頭　尼崎　飯尾寄與史

井戸水の一升瓶で水見舞　同
月刊の續きを讀んで居る醫院　大阪　富岡巨人
圓タクの乘り場雨降る日に困り　同
花嫁へ少し氣兼ねな白さなり　大阪　田中風葉
妹が痛いとこ突く父の前　同
無雜作にチップは帶へ突込まれ　廣島縣竹原　黑本芳泉
出戻りを解つてくれる母が在り　同
そこらぢう散らして子供寢てしまい　朝鮮　弘津慶一
油染んだ服男性の香りする　同
僞りの履歴と知らずほめちぎり　大阪　田中楠美
女としての慾へ話がまとまらず　同
子の漫畫も兵隊さんでないと駄目　今治　田窪石鐵
なんまいだんぼ靈地へ一歩〳〵ゆく　同
かくれんぼ代つてやつた姉心　大阪　片山鏡水
母親は陸ではら〳〵はら〳〵し　同
空模様母は辨當に傘を添へ　下關　中村九呂平
新兵の此處は天國W・C　同

阪神水害地所見

モンペイを穿いて國婦の賴もしさ　尼崎　天羽鴨路

近寄り切れぬ淋みしさ女もち　大阪　池田悠起
置時計只重みのみ見せて在り　防府　國弘半休
菜つば服長期戰へ覺悟する　大阪　矢杉愁花
アツパツパ着て嫁に行く髷を結ひ　○○　大森千代香
見送りの愛人ドラで追出され　長崎　田中水哉
闘病の自信はかなく消えました　廣島縣竹原　西野旅人
朝顏で窓を塞いで涼しがり　大阪　江草孝義
繪日傘へ機銃のやうに野次が飛ぶ　山口縣　和氣山尾
急報の市外電話へラヂオ止め　今治　平尾清重
月賦屋へ居留守も使ふ世帶なれ　廣島　奥富天作
こわされる家とは知らず巢を造り　廣島縣竹原　黑本十七夜月
買上手ちやんと度胸をきめてゐる　名古屋　中西周鈴
母のない子と知れる日の想はれて　大阪　中出木公
毎日の喧嘩に母は笑ふだけ　豊中　黑川波矢子
夕顏に女ばかりの涼台　松江　白石紫薇花
雅號では用をなさない戸主となり　長野縣上山田　佐二木千隈
リーダーは土地の言葉で山を呼び　大阪　民三十路

美髮は紳士道！

フケ・カユミを止め白髮・若禿を防ぎ
明朗な青年美を創る伊豆椿ポマード

頭髮のホルモン劑（コレステロール配合）

伊豆椿灰皿ポマード

御使用後こてもスマートな灰皿になる新案容器！

全國百貨店、有名化粧品店
藥店、小間物店にあり

伊豆椿香油本舗
大槻彩芳園

川柳評釋 都會風景

麻生路郎

けなげにも家主の犬を嚙んで來た

豆秋

一概に家主が惡るいとも云へないのに借家人といふものは何かにつけて家主對借家人意識が出る。家主のくせに寄附がすくないと頭からけなす。一寸したことにも家主を眼の敵にする。笑つてはいけない。彼等は眞劍なのだ。

君などは惡貨の一人流行るべし

一徹

面罵された開業醫の澁面を思はされる。グレシャムの法則は斯かゝる方面に於ても又眞理である。

酒だビールだ電車賃が無くなつた

夕鐘

一日の勞苦は、家路を急ぐ筈がない。十錢漫才から吐き出された彼が酒へ走るのは當然過ぎることかも知れぬ。

就職へ見事に散つた齒磨粉

白峰

いよ〳〵就職口が見つかつた。採用ときまつた朝の齒磨粉は憂鬱とともに四散した。俺は少しくあはてるなアと思ふと微笑禁ぜるものがあつた。

もこポリスささいの言葉尻をとり

喜由

すぐに法律問題を擔ぎ出し、何んでも彼でも法律で解決せうとして澁面をつくらなねばならないとしたら、それが果して幸福かと考へて見る必要があらう。敢て元ポリスに限らず、習性は怖ろしい。

名刺名刺名刺に今日も疲れたり

蛙郎

弱い商賣だ。會はない譯にも行かぬ。應接室へお百度を踏む。サラリーは疲れ代か。

銀狐神通力はなかりけり

水車

ヒスの難はあるかも知れぬが、神通力はゼロだ。これで神通力でもあらうものなら、亭主は悲鳴をあげるだらう。

橋筋は春の匂ひのこうこ卷

豆秋

橋筋とは大阪の繁華街、戎橋筋の略稱で戎橋以南、難波驛までをいひ、ハツスジと訓んでゐる。こうこ卷から發散する春のアトモスフェアは朗らかである。

お役人係りが違ひ横を向き

夢裡

お役人を單なる冷血動物だと解するのは少しく早計かも知れない。彼等はあまりに多くの規則に縛ばられ、自由を失つてゐる場合が多いからである。しかし、そうしたことが習性となつて、フンバンに堪えない滑稽を演出するものである。

川柳 解題と例句 ＝路郎編＝

(2) 途中下車

★途中下車は鐵道用語で、旅客が旅行中、任意に途中の驛に下車し、一旦構外に出場し、再び乘繼ぐことを云ふのである。

★途中下車制度は次の三方法が行はれた。

(一)任意下車制＝通用區間内何れの驛にも任意下車し得る制度

(二)下車無効制＝途中下車の取扱をしない制度

(三)制限下車制＝途中下車を爲すに或る制限を加へた制度であつて、次の二種がある。

(A)下車驛指定制＝一定の下車指定驛に於ては任意の下車を認める制度

(B)下車回數制＝下車を回數に依つて制限せんとする制度

★鐵道省の途中下車制度の沿革を書いて見やう。少し記事が堅苦しくなるが途中下車制の沿革に關する告示を通して鐵道省が、遞信省に屬したり、鐵道院になつたり、鐵道省になつたりする變化も知ることが出來るので詳記して置く。

(1)一般乘車券制度の沿革

○明治二十二年七月二日（鐵運乙九九二）五十哩以上の切手所持者に限り任意の驛に途中下車し得る。

○明治二十三年十一月一日（明治二三、一〇、一八鐵道廳告示）五十哩以下の切手所持者は途中下車し得ない。

○明治三十八年四月一日（明治三八、二、二四遞信省告示六九）五十哩以下の乘車券所持者は途中下車し得ない。

五十哩以上の乘車券所持者は指定驛に限り途中下車し得る。

○大正五年五月十五日（大正五、三、一鐵道院告示五）下車し得ない片道二十五哩未滿

川柳・雜・案内

川柳を作る人愛好する人の必讀誌
毎月一日發行 一部廿錢 送料一錢
川柳倶樂部
東京牛込區揚場町八川柳倶樂部社

東海の代表誌 川柳草薙
一部一〇錢 一年一圓（郵税共）
名古屋市南區八熊町寺田
發行所 草薙川柳社

川柳きやり
菊判每號七十數頁
每月一日發行 一部廿五錢
東京豐島區高田本町二ノ一四六八
川柳きやり吟社

京
一部十錢 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊 川柳 みちのく
一部十五錢 一年一圓五十錢
青森縣黑石町 川柳みちのく社

三味線草
一部廿錢 一年二圓
大阪市此花區西九條二ノ六二
大阪媛柳川柳社

「大正川柳」第五一號及び第五八號相當の代價にて讓受けたし
川柳雜誌社内 BB生

懸賞川柳
課題「ス・フ」九月十日
「身嗜み」十月十日
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏
秀逸數句に謝謝を呈す
宛先 大阪市西成區玉出本通三ノ三六 麻生路郎氏方 化粧新聞社柳壇へ

大寫活字十四字詰三行（五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手代用可）改號、移轉、句會案内柳書廣告、その他

レヴューの列がさつと變つて手と手と手

柳路

脚、脚、脚の魅惑が――いつのほどにか、手と手と手の纖細な美しさへと流れてゆく。そして再びハツラツたる脚線美に幻惑される。コレがレヴューのマヂツクかも知れない。

牛の列淋しく鳴いたアスハルト

青兒

埃りつぽい都會の街路と、牛の一列とはおよそ緣遠いものだ。彼等はただ默々としてアスハルトの上を歩みつゞけてゐるに過ぎない。淋びしさは寧ろこの狀態をジツと眺めてゐる人の心の淋びしさだ。

拾ひ屋も上海だより唱ひつゝ

豆秋

應召に次ぐに應召。あつちでも千人針、こつちでも千人針。銃後の總てが張り切つてゐる。拾ひ屋だけ除外されていゝ譯のものではない。

さかなやはさかなの匂ふ錢で醉ひ

紀太

おでんやの客は吳越同舟だ。こゝでは位階勳等が光らない。階級は無差別だ。しかし、しかしだ。さかなやの錢はさかなの匂ひがすることを忘れてはならない。

交叉點見世物にしても面白し

變人

老若男女――これを職業別にすれば百人百種。服裝が又千態萬樣。なるほど見世物になるかも知れぬ。

早く寢ろねろと商店法が言ふ

大樓

たとへ机上でつくつた商店法でも規則は規則だが、いつまでも起きてゐて商ひがしたいといふ物好きのゐないことも事實だ。役人も考へねばならぬ。商人のための商店法が商人を苦しめるやうなことがあつてはならぬ。

それ〳〵に朝顏を出す島の內

かほる

園はれの身の荒い浴衣で夜店物らしい朝顏に水を遣る姿は妖艶だ。敢て大輪を競ふ譯ではない。お互ひに餘裕を誇りたいのだ。

飲まされて味方を賣つて歸つて來

沒食子

詰まり飲まされたのだ。今更後悔しても追つつかない。これがなければ、俺はもつと出世してゐるのだが――。

あらゆる趣味のお稽古場

松坂倶樂部

手ほどきから奧義まで氣輕く、樂しく、御上達

會員募集

お稽古目種

長常清小鳴 磐唄津元物唄

箏尺舞謠能 樂小鼓曲踊曲

ピアノ聲日書茶 樂道畫道本

華料洋俳川 道理句柳

氣棋松坂レコード吹込所 學道

川柳講座

川柳雜誌主幹 麻生路郎先生 擔當

はみ込申御

七階松坂倶樂部

電話(代表)戎三〇〇三番

松坂屋

大阪 日本橋

同 二十五哩―三百哩未滿 二回

同 三百哩―七百哩未滿 三回

同 七百哩―一千二百哩未滿 四回

同 一千二百哩以上 五回

大正十年一月十日(大正九、一〇、二五鐵道省告示九九)

片道 五十哩未滿 一回

同 五十哩以上―三百哩未滿 二回

同 三百哩以上―七百哩未滿 三回

同 七百哩以上―一千二百哩未滿 四回

同 一千二百哩以上 五回

○大正十三年三月二十一日(大正一三、二、一八鐵道省告示八)

片道 五十哩迄 一回

同 三百哩迄 二回

同 七百哩迄 三回

同 一千二百哩迄 四回

同 一千二百哩以上 五回

○昭和五年四月一日(昭和四、一二、二九鐵道省告示二八八)

片道 八十粁迄 一回

同 五百粁迄 二回

同 一千粁迄 三回

同 一千五百粁迄 四回

同 一千五百一粁以上 五回

○昭和七年八月一日(昭和七、六、六鐵道省告示一七九)

原則として任意の驛に於て途中下車し得ることになつて今日に至つてゐる。

(2)自動車定期乘車券 (3)回數乘車券 (4)電車區間特定旅客運賃乘車券 2・3・4は途中下車したときは前途無効である (5)團體乘車券 (6)貸切乘車券 5・6は豫め鐵道で承認した驛に限り下車することが出來る (7)急行券 (8)寢臺券 7・8は途中下車したときは前途無効である。

★大體、途中下車は運賃の建方の遠距離遞減法と不可分の存在だが、途中下車は切符の買ひ換えをしなくても濟むので單に旅客にとつて便宜であるばかりでなく、鐵道側でも手數と費用が省けていゝので、遠距離遞減法を採用しない距離比例法の私鐵などでも途中下車は認めてゐるのである。國有鐵道は歐米がその方を採用してゐたので始めから總てそれに倣つたのであるそうだ。

途中下車訛ある妓に送られる伸路

途中下車夫婦連れでもない二人明坊

途中下車蛇の目の傘が重いなり某人

途中下車いきなり車夫に寄りつかれ山雨樓

色町の行燈が明い途中下車久米雄

途中下車女房の里へバスがあり水客

途中下車瓦煎餅買つただけ木履

途中下車大和の判に急ぐ靴同

武玉川三編研究（二〇）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(310) **側てロ舌も知らぬ夢助**

省二＝夢助は夢をみて居る者を、罵る擬人名で、夢助孫左衞門などとも云つた。男にも女にも用ひたから、『一盃呑と母も夢介』（武・五）、原句の場合は、どちらにでも解せられはせぬか。老人客の口説に、『新造はふる氣でなし寢る氣なり』で、しびれ薬を服むだやうなのである。女房の口舌に亭主の夢介ともとれる。『其眠むさ化物側で管をまき』の化物は、女房の悋氣振り、其眠さで夢介になつてしまうのである。

秋の屋＝年若の男女の側に、寢た老人だと思ふ。一筆魔可候作の「夢助話」といふ、滑稽本が有つたと記憶する。

東魚＝寢こけてゐる、たわいなさに可笑しさがある。「夢介」と云つた處に、その心持ちがうかゞはれる。

(311) **くろもしに足輕の手も香はしき**

省二＝足輕の荒くれた手が、黑文字のよい香のするのと、對照興味。

秋の屋＝猿屋の楊枝でも、買つて歸るのであらう。

東魚＝足輕自身が内職に、楊枝削りをするので、その香が手にしみる。

省二＝内職説面白し。香しき理由が強くなる。

秋の屋＝前説取消。手内職に賛成。昔の辻番の老爺なども、小楊枝を削つたもので私もそれを看て記憶をしてゐる。

(312) **色には出さぬ京の貧乏**

省二＝そこは都人の衿持と洗練された處世術。（京自慢色の事が含まれて居るのであらうか。）

秋の屋＝色彩の紅は含んでゐまい。顏色または樣子の意である。

東魚＝見得を張つてゐると云ふ、心持ちかと思ふ。（一面に江戸者なら、ザックバランに貧乏を、さらけ出すがと云ふ意を陰にして。）

(313) **十日ほと覗かぬ樣にとうからし**

秋の屋＝畑に栽培した蕃椒が、十日程も過ぎたければ色附かぬから、夫れまで採つてならぬ、亦覗いてみる事もならぬ、と家人を警めると云ふ句歟。

東魚＝毒斷するに對して、十日間程は唐辛子は覗いても毒だよと禁ずる意。童の的二編沽凉點に、『毒斷の目に甘さうなとうからし』がある。

省二＝お説通り。浪人が門田植をやる。身邊の淋しさを思はしめられ、そして結局浪人性分のやり放しとなつてしまふ。

(315) **京を相手にきつい事いふ**

秋の屋＝京都方廣寺の鐘銘の故事らしいがこの外に正解が有るかも知れぬ。

東魚＝江戸者が、やさしい京言葉の者に對して、荒いもの云ひをすると見て、前説の故事を陰に匂はしてゐるものと考へては如何

省二＝然らむ。江戸ッ子は鼻柱が強いから。

(316) **緋の衣眠たい朝の仕事也**

省二＝晨朝の勤行をせねばならぬからかそれならば僧正の當然の任務なのであるが。『緋の法衣きれば浮世が惜しく成り』で、案外俗人並みの僧正もありはしたらしい。

秋の屋＝僧正の着る法衣を、緋の衣といふのは俗稱で、正しくは紫衣といふべきである緋色の法衣は、僧正よりも下位の僧がきるものである。此の句は法衣を裁縫する、職人を咏んだのではない歟。

東魚＝朝の淸らかな間に、縫ふといふ心持かも知れぬ。初めは小生も省二氏の説の如く考へてゐた。

省二＝「仕事」が僧正にピッタリとせぬ疑問を存して置いたが、職人かも知れぬ。『緋の衣縫ふ人の夕榮』（金砂子下卷。）紫衣は佛制でなく天子より賜ふ。

(317) **谷ツ七郷の魚ひかる也**

省二＝「江戸の親にも勘當うけ、住所なく鎌倉の谷七郷をくひつめても」（與話情浮名横櫛）。「鎌倉の谷七郷すべて三里四方あり入口あまたあり、中にも江島口より腰越に出てゆけば、右の方は大海なり」（東海道名所記）。ヤツは谷の謂。「昔の繁花は京鎌倉と双へり、されど東南に海近く、西北に山連り封境狹くして平地少く、既に谷々の號あり」（東海道名所圖會）。此魚はどの種でもよいかも知れぬが、鰹として可なりと思ふ。

秋の屋＝谷七郷は、たゞ鎌倉の代名詞に用ひた迄である。此の谷七郷といふのは、鎌倉幕府時代に、この土地を八つに區劃して扇ヶ谷、比企ヶ谷其處の名稱を附けたものと思はれる。

東魚＝初鰹と考へてよい樣に思ふ。

(318) **隙な日は系圖見て居るゑほし折**

省二＝系圖を調べて置いては、參考とするところ、烏帽子折らし。俳諧職人盡には、烏帽子折の繪が載せられて、「今時の御ゑほ

しはちとそりて仕候」と、かき添へてある。

秋の屋＝折烏帽子には古實があつて、源氏は左折り、平氏は右折りなどゝ定まつてゐる故、他より注文を受けた時の參考に、家業の餘暇に、諸家の系圖を見て置くとである。

東　魚＝何となく長閑なさまが感じられる

(319)　未來の種も捨ものゝうち

東　魚＝これから、どう發達して行くか分らない。云はゞ、宛にしないでゐれば、捨てたもの同樣だ、と云ふ丈けの意かと思ふ（畑のものにしても、人間にしても。）

省　二＝「末來の種」に、もつと意味がありさうな氣がする。

秋の屋＝未來の種といふと、佛家で所謂後生の事のやうに聽えるが、「兎も角もあなた任せの年の暮」と咏むだ、一茶のやうな氣分かも知れない。

(320)　呼子とり青い顏から先へ出る

秋の屋＝呼子鳥の巣立をする態で、黃色の嘴が先へ出るとでも云ふの歟。

東　魚＝「青い鳥」は、未熟なとか、若いとか云ふ意であらう。

省　二＝前二解の如くならむ。前句に因り働きがあるのかもしれぬ。

(321)　悟り盡して元の羽二重

秋の屋＝奢侈の餘り、さまゞの織物や染色の小袖を、着てみたけれども、猶且黑羽二重に優る物はないと云ふのである。

東　魚＝凝つて思案にあたはずの譬。

省　二＝着物道樂に、ふけつたものが最後、悟り盡して、元の木綿着に戻つた話がある。木綿物を少しも皺をつけずに着通す事は、絹物以上に心掛けねばならぬからだ。そこに別趣の着物道樂が醒してくるのではある。―悟の極致は嬉れしい。雲烟達合登經山、還修圓福古道場、覺了法身無一物、元是閒蹕平四郎

(322)　可愛からるゝ種の三味せん

省　二＝「種」は因、或事柄の謂で、三味線を彈く事に因つて、可愛がらるゝのだ。

秋の屋＝婦人の武器は、三絃だとも云へる

東　魚＝小供ながらに、上手に三味線がひけるのではないか。

(323)　取揚婆々のおとる乘もの

省　二＝大急ぎのさま。駕籠にゆられて、おどつて居るやう。

秋の屋＝現代ならば、自動車の上で躍るであらう。

東　魚＝可笑味がある。

(324)　異見せぬ遊ひははやく倦が付

省　二＝加留多にこるとか、馬に乘つてみるなどの遊び事は、自ら直に倦きがきて、止めてしまふが、吉原遊びの病みつきや、賭博の味を知ると、一つは心中まで、一つは親の財產を危ふくするまで、深入りする。

秋の屋＝利慾に關する遊戲のみは、何時までも倦が來ないやうで吉原遊ならば、年闌て後罷む時がある。

東　魚＝穿つた句である。異見を要しない毒にもならぬ遊びは、兎角に倦きが早い。

(325)　疊の上の蝶はふり袖

秋の屋＝疊の上に翼を休めてゐる蝶の形は袖だゝみにした小袖のやうだと云ふのであらう。

東　魚＝美しい腰元などが、振袖をひらめかして、立ち振舞ふさまは、恰も蝶の立ち舞ふ如くである。疊の上即ち座敷の蝶は、振袖の美しい女達だと云ふ意であらう。

省　二＝私もさう解する。「蝶」は形容。反對句に「眠る時蝶は着物を袖たゞみ。」

秋の屋＝「蝶」を形容だとすると、「は」の字が疑問となる。

東　魚＝草の上のは、本當の蝶。疊の上のは、と云ふ心持ちで、「は」は差支ないやうに思ふ。

(326)　家督あぶなく器用過たり

秋の屋＝遊藝などに器用な男は、兎角に身が持てない故、遂には廢嫡といふ事にもなる

東　魚＝生ゞ中才走つたのは、危險である得てそんなのは、藝事も直ぐ上達するものである。

省　二＝藝は身を助けるといふが、その器用すぎる藝で身を亡ぼして、遂にたてぬ者がどの位あるであらう。身を助けるのは、家を潰した後の始末なのだから困る。

(327)　稀に吉田の二階から顏

秋の屋＝吉田通れば二階から招くであるが「稀に」が疑問である。

東　魚＝「吉田通れば」の唄などがあるから、常に二階から顏でも出せば、賣女かと思はれやしないかと云ふ心持ちで、稀になのであらう。（稀にウカと出すと云ふ意味で）。

省　二＝猶、研究してみたい。「稀に」があつても、俗謠の意味に通ずるのではないかと思はれてならぬ。

(328)　棧留を着るもさかりの草履取

省　二＝草履取も一ト盛りには、棧留縞を着たりして、小ざつぱりもしてみる。―吉原のお供の經驗もあらう。『おそめが供の光る棧留』（武・十六）

秋の屋＝草履取の常服は、紺の大なしであるが、棧留縞を着るのは、休日に他出する場合と思はれる。

東　魚＝草履取などは、目はしが利いた者でなければ、役に立たない。棧留などで氣の利いた姿で出る時など、遊びに行つても、相當なものであつたらう。

(329)　山伏の火の草へ來て消へ

省　二＝山伏が山から下りてくる。手に持つた火は草に落ちて消える。

秋の屋＝山伏の火とは、松明のことを云ふの歟。「草へ來て消へ」とは、路傍の草の上へ火の粉が散るのであらう。

東　魚＝松明であらう。燃え盡きんとするのを、投げすてたのが、轉げて草の露に消えたと云ふのであらう。

(330)　美しい氣を捨る三十

省　二＝(214)『三十に成ると女の世がすたる』で、凋落期に入れば、所謂女性ホルモンの關係上、三十小皺となる。（眼の下の小皺のため淀君は苦勞したといふ。）自らもあきらめてくる。

秋の屋＝白髮三千丈でなくても、鏡に向つて顏の皺をみたならば、自分の容色の衰へたのに、氣が減るであらう。

東　魚＝女自身に衰へを知る處に、一抹の哀愁がある。この頃の女は三十位でも、長襦袢かと思ふ樣な着物をきてゐたりするが、昔は十六、七なら塚になつてゐるから、三十にもなれば十年以上の世帶苦を味ふ譯で、老ゲもしやうと思はれる。

武玉川（前號）正誤

頁	段	行	誤	正
二	一	十三	その中	牛也
二	二	二	空世	雨兩
三	十六	廿三	雨解之と	元

川柳塔

路郎選

大阪　麻生葭乃

因襲脱し難きビルの鳥居よ
煙突が骨佛にも見ゆる書
あれも又數の中なるウエートレス

大阪　橋本綠雨

松葉杖銃後の中へ勇み立ち
宣撫班日の丸の汚れみて廻り
空襲に犬の吠えてる辻に立ち
萬歳が日本アルプスこだまする
連峯が影繪の如くそびえて居

大阪　高橋かほる

マアいつぺん行つてみなはれと口入屋
布團綿内の隣も家根へ干し
好い風のは入る處で記者に會ひ

大阪　奥村丹路

夏の町「名譽の家」に子が動き
腹立てて歩けば夏の陽が眞上
罪のない嘘を殘して浴衣がけ
氣儘わがまゝ夏の夜の夫
金儲けだつかと支那へ行く話

張家口　岩崎柳路

タイピスト千人針の禮が着き
麻雀は時局氣にした音で負け
流れ星祖國の事をふと思ひ
午前二時歩哨の腕に刻む音
君そんな下手な惚れよはよし給へ
大阪の妓に大津繪を聞かされる

兵庫縣　水谷鮎美

俊寛のこゝろがみゆる島綠き
行水に母の眼鏡の置きごころ
洋犬つれてマダムは青き風に立ち
文鎭に押さへられてる歎願書
雨の窓マルキのパンをわけてやり

名古屋　吉田水車

警報解除都會の音をとりもどし
星のかず明日を約束する如し
泊る氣の下呂春雨に迎へられ
八十億の内の一圓預けて來

大阪府鳳　妹尾變人

ごうぞこうぞ小金がたまり犬を飼ひ
夏みかん病人と云ふ枕もと
君の征く萬歳となり聲枯れる

大阪　須崎豆秋

觀世音菩薩の膝に蚊が止まり
暑いから猫が泣いても腹が立ち
京都だけあつて交換手も美人
大毎をすゝめに廻る黒眼鏡

神戸　水害

寫眞機を提げた見舞はよしてくれ
千人針ガードの下で日が暮れる
表情の拙い男に冷かされ
カメラマン乘合バスに間に合はず

日本アルプス登攀

槍穗高キャンプの人に拜まれる
雪渓をすべる若さを樂しまん

大阪　後藤青兒

出征の旗は子供が持ちたがり

二〇一號室斷片

不朽洞主人

筑前博多の符箋

森東魚君が、社用で支那へ行くことになつたが、日がまだ決定しないといふことであつた。いよ〳〵日がきまつたら知らして呉れ給へ。送別會でもやらうぢやないか――と云つて別れた。その後何んの音沙汰がないので、どうなつたのかなあ。いよ〳〵行くのかなあとフッと思ひ出しても忙しいので失敬してゐたが、つひ鼻の先のビルなので一度訪ねて見やうと思つてゐた。

Kのおかみにも、和尚さんへKで通用するニックネームゝが支那へ行くことになつたので、一度引つぱつて來やうと約束してゐたので、それも果たしたいと考へてゐたら、東魚君の方からヒョッコリ、ビルを訪ねてくれた。

「イヤーどうした」と云つたら、「支那行きは中止だ。まだバタ〳〵するに及ばないのだ。それでそのことを知らせるつもりでハガキを出したら、博多から符箋がついて戻つて來たよ。筑前橋と書いたら、博多へ行くなんざあ、川柳だネ。郵便局なか〳〵洒落れてるよ。」と相變らず朗らな調子だ。

支那行が中止となつたと聞いたのでなんだかホッとした。社用なら沒法子だが、正直なことを云へば川柳のためにいつまでも大阪にゐて貰ひたいと思つてゐる。

今の川柳界に、古いことが判つて、新らしいことに理解を持つ人は幾人もゐないのだからな。

適材を適所へおくれ

雀郎君が病氣だといふことを耳にした。「川柳講座」の偉業を發表してその未完成のまゝにあることが、同君を心身共に疲らせたのではないかと、秘そかに暑中御伺申上げます。

當地は昨今非常に暑く毎日さすがの小生もアップ〳〵してゐます。しかしハリキッてゐます。月に三四回前線へ出向きます。

植山九天

（同君の所は社へお聞き下さい。編輯局）

案じてゐる。本當は象牙の塔にとぢこもつて、川柳研究に殘頭すべき天分を有してゐる君が一つの事業に乘り出したことは私等の偉とし且つ多としなければ

金塊を切つて使つて見せたい世
相棒を聞いて宿直代るなり
上着取る時の話は威勢よし
「故障中」電氣時計は夏休み

（○○）宮岡白峯

謹みて遺言書も書かされる
五圓札替へてラッパへねつかれず
海の子だ水の子だよと部隊長

大阪　加藤ライト

三人が降りて三人無理に乘り
親も子も裸ヂィ〳〵蟬の聲
貸切の窓萬歳の旗を振り
出し拔けに萬歳を聞く赤襷

大阪　正本水客

旗出して置いて新婚出掛けたり
水打つて新居の匂ひ椽に滿つ
キャラ〳〵とレヴュー樂屋へくずれ込み

豐中　黑川紫香

葉の影でみの虫涼しそうにゆれ
傳說を聞く樟へ蟬が鳴き
復興のシャベル六甲見上げたり

大阪　丸尾潮花

萬歳へ日本一の男振り
君を待つ姿ネオンの灯の眞下

大阪府高師濱　大坂形水

大阪のバン賣切れた水見舞
水害の驛から今日も應召兵

○○病院にて

傷兵の妻か汗ほの子を背負ひ
下駄半ズボン夏凌ぎよい銃後なり

大阪　岩橋双虎

五錢喫茶五錢ですまぬ顏がき、
梯子酒やめてゐますの慰問文
晝の月に守まられてゐる百度石

兵庫縣御影　長崎柳秀

出征の分を働く灯をおろし
鋏にも娘心は鈴を附け
夏休み勤勞奉仕薪も割り
百折に堪えて望みの人へ嫁し
流しもミホームドレスの裾に風

大連　佐々木三福

洪水街を襲ふ

人工を零に戻して流す土砂
山を切り河にいごんだ果の水
水涸れる街に惡水禍を卷き
人工に文化に抗し狂ふ水

松山　酒井大樓

如是我觀血の出る金で張る虛榮
巡禮へ報謝てのひら返す世辭
一乙も二乙も征けり酒を斷つ
奉仕して歸り我家で王者振り
水害鐵柵何の役立たず
ウインクの型で瑩の飛んで行く
此處の椅子あの椅子女給喋る事

長野縣湯田中　金井有爲郎

倦怠期蚊張を透して口ごたへ
幼な友井戸を覗けば見えそうな
征く友の視線ミ會うた汽車の窓
茄子きうりせめて銃後へたんミ生れ

今治　渡邊曉童

名人に催促をして叱られる
陽炎を堀り下げて行く瓦斯工事
長期抗戰猫よお前はごないする

愛媛縣大洲　今川椋影

是非來いミ名所繪葉書誘ひに來
咳が出た話續きを待つてゐる
一家團欒辨當へ丸うなり

ばならぬ事で、壯途半ばにしてたとへ失敗したところで何等恥づべきことではないと思ふ。君があの事業に手を出したことはたしかに文學博士や法學博士が會社經營に乘り出して失敗し、謹んで暑中御見舞申上ます。私儀應召に際し且又任地へ出發に際し多大なるは厚情に預り感激いたして居ります。任地到着ミ共に御通知申上げる筈でしたが色々の事情のため今日に至りました事を御詫び申上げます。御蔭を以て海陸共至極元氣で唯今は任地に於て任務に服して居りますから御安心下さい。

康德五年七月二十九日

宮岡義秋（白峯）

（編輯局曰く。住所を誌上に發表出來ないので同君への御通信は留守宅　府下柏原町本郷　宮岡公子樣又は本社へお問合せ下さい）

自決した多くの例にならつた觀があるが、自分に不適な事業と見たら、アッサリ兜を脱ぐのも君の前途を朗らかにする道ではあるまいかと思ふ。せんりう社同人諸君もこの點をよく話し込んで同君の眞に生きられる道を講じて貰ひたいと思ふ。

私自身も近ごろは忙しいので君への直接の通信を怠つてゐるが、こんなことを直接に云つてやつたところで、君自身の生面目さが、そう大膽な態度に出るとも思へないので、柳界の輿論が同君を軌上へ引戻すやうにさせるやうにつとめるより仕方がないと思つてゐる。せんりう社同人諸君も大いに考へて見る必要がありはしないか。我々も一緒になつて、「川柳講座」について更に考へやうではないか。

いづれにしても雀郎君の健康恢復が急務だと思ふ。眞に攝養をのぞんでやまない。

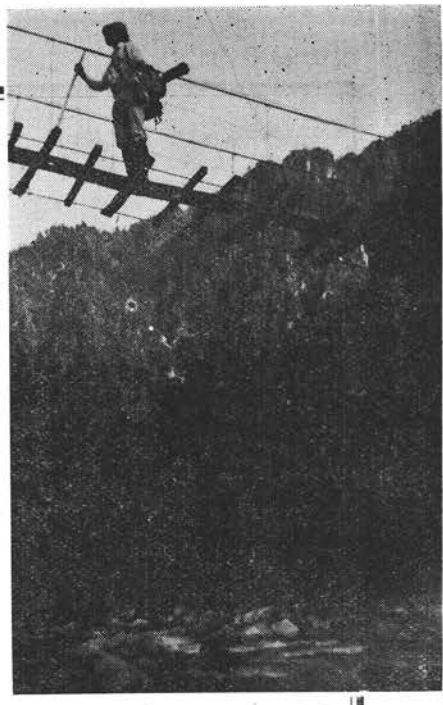
戰線の柳友へ

戰地からいろ〳〵たよりを貰ふ。それを發表して銃後の柳友にも安心させたいと思ふし、又それを掲載して更に戰地にゐる柳友に送つて、慰問の一つにもしたいと思ふが柳友の所在地すら、誌上に發表する事を差控へねばならぬ狀態にあるので、折角の手紙や句や文章を僕等編輯局の人々だけしか讀めないのでかなり心苦しく思つてゐる。何れ發表の許される時期が來やうと思ふので、それ迄辛棒して貰ひたい。決して沒にしてゐる譯ではないから其點は諒として欲しい。いろ〳〵な事情で國策による取締を遵奉してゐるのだ。

本誌が特に嚴重な取締をうけ又これを嚴守してあやまりのないやうにつとめてゐることも、本誌が弘く大衆に讀まれてゐる關係なので、こゝもと、多少の矜持がないでもない。

郵便物の遲延、誤達なども非常時としてはセンダースリスクなのだから、あきらめなければならぬ。お互ひに、それによつて神經を尖らせることのないやうに心がけたい。梨の礫でもいゝ。僕の方は僕の方として出すから、戰線の柳友も公務に支障を來たさない限り、睡眠時間をさまたげない限り、手紙や端書をくれたまへ。相當の日數が經過してゐる通信であつても我々としては大きな力となるのである。

お食事とんかつ　湖月
奈良市法善寺境内



生蕃三題

六月三日より十九日まで軍嚮下の台灣産業及國防視察の日誌より

庄萬よし

その一　生蕃と握手

台灣の東海岸は基隆から蘇澳まで三時間餘はガタ汽車が通じてゐるが、それから南は、花蓮瀧まで四五十里といふものは、今日の總督府の財政ではとても鐵道を布けない斷崖絶壁である東海バスが日に三回程定期で通ふ道路が切り開かれてゐる、途中に四五ヶ所の停留場があつて上り下りが交叉するやうになつてゐる。吾等の一行六名の外に四五人の乘客は何れも初めてのコースである。嶋が一つもない深淵が果てもなく大洋に續く、一羽の鷗さへ見付らない澄み切つた海は今日は鏡の如く靜かである。紅葉することを知らない熱帶の雜木は絶壁の上下に繁りに繁つてゐる。處々に道路の修繕の工夫に會ふ以外に絶對に人に會はない。バスの中はもう喋る種が切れて皆居眠りを始めてゐる。或る停留所で生蕃の老夫婦が休んでゐたに出會ふて一同は救はれたわれ〳〵の豫備知識は、首狩り時代の生蕃の話から多く出てゐない。だが、眼光が鋭い外は柔和な相である。私の田舍の親類にも多くある一生を勞働に消費し盡した老農夫の型である。私は、いち早く朝日を二本宛拔き取つて二人に與えマッチを摺つてやつたら「ありがたうございます」とハッキリ答へるじやないか。日本人の先祖が台灣から來たことを庄君が証明して呉れたと一行は大喜びであつた、言葉は「おはよう」「こんにちは」「ありがたう」以外には何も通じなかつたが、背の籠の燻製の鮭と野生果物とを嬉しそうに見せて呉れた。

哀れさは腮の入墨しはになり

その二　舞踊の天才

タロコ口から國立公園タロコ峽まで道幅三尺にも足らない小徑を三里登るに、長さ百米、高さ二百米の日月橋の外十ケ所の台灣特有の釣橋を渡らねばならない。タロコ峽には蕃族が五六軒と駐在所と公共ホテルとがある。台灣の水は悪いが山の水は冷く湧き出てゐる。この水が湧く處が山地蕃の村落の唯一の資格である。耕作に二里や三里を行くのは平氣な彼等には、直立何千尺の岩山の中で湧き出る水へ水へと集つて數戸以上十數戸の部落が出來るのである。もと平地を占領してゐた先祖が、廣東人や福州人に征服せられて、山へ山へと退却して生活を續けて來たものだから首狩りは祖先への復仇に外ならぬのである。生蕃の結婚は男女十七八才が普通で、その披露宴は、數日を費す豪華版で、呑めや歌へのコーラスの連續線である。青年の求婚は、花嫁の兩親の許可と酋長の許可を要する外、この費を稼がねばならないから許婚の年限は二三年を要するが普通であるこの間貞操の正しいこと生蕃の誇りであつて、眞の一夫一婦はしてゐるのが少くない。

蕃童に猿住む淵を教えられ

その三　理蕃巡査

台灣東海岸唯一の築港花蓮港は生蕃の勞働奉仕に負ふ處が多い。一千万圓の豫算で三千噸級十艘を入れるに足る工事は明年度に完成することとなつてゐる生蕃は品物を欲するが金を欲しない。生産はするが貯蓄をしない、晴耕雨讀でなく晴耕雨粋だと言はれてゐる。生蕃の商人はない。粒々辛苦の獲物の毛皮や蕃布を二束三文に本島人にせしめられる恐怖心から三越の通信販賣が山の蕃社へ多く入り込んでゐる。最近の理蕃事業は主として山地蕃社を平地へ集團せしめて農耕部落を創設することである。この新しい平地部落は計畫村落で天照皇太神を祭る神社を中心に四五十戸の蕃屋が整列して、道路に草一本もない清潔さである。駐在所が酋長と連絡を取つて訴訟、教育、農耕、祭神等あらゆる共同生活の指導をやつてゐる。善い意味のユルフォース制度である。恤兵献金さへ相當な成績を擧げてゐる。理蕃巡査はこの村落の文化と秩序の中心であり崇拜の的である。内地人を敬愛して、内地人に會へば心ず停止して「こんにちは」と挨拶する。最近日本の劍舞を教へるとこの舞踏の天才は内地人以上の型を示して呉れると聞くのも嬉しい便りであつた。最近軍夫に召されて出征してゐる青年が山西の山地で獨特の活動をしてゐるのが少くない。

十年二十年理蕃に從事してゐる巡査こそ生き甲斐のある尊い生活だと思へた。

★川柳街雑筆

庄萬よし・惠美酒・山本葉光・酒井斗風

九州蛮理蕃巡査の板につき

惠美酒

一睡前に

「川柳雑誌」第一七四號がつく。責任上、直に「武玉川研究」を通讀し、正誤表を送る。机上の寒暖計九十度を示す。今朝は食前に少し遠方まで散歩したので疲勞の眠む氣に襲はれる。寢椅子に横はり、雜誌の頁を繰ると、生方さんの

二日つゝいて買かつく夢

に對し、「買が付く夢」說が載つて居る。甚だ面白い、教へらるゝ多し。挨拶狀を差出さうと校友名簿を探す、十年度のよりみつからぬのでやめる。御引用の政子の話は、彼女の一代史の出發挿話だから、爰ぞ古川柳家が見遁すべき

買ひあてた夢て女の天下一

「天下一」に「鏡」をも含めて居るのが味噌の臭いところ

いゝ夢を政子御前は買ひあてる

此類の作はまだ〳〵有る。武玉川の句は同じ吉夢が續いたのであらう。夢は三日目が大切だといふ俚諺もあり、十分あてはまる。

明日は土用入だ。土用入り三日に秋風が吹くと亡母はよく言つてゐた。暑くても我慢すべき時局柄、これから一睡をむさぼつて、買ひがつく樣な夢でもみるか。

笑ひを失つた子規

山本葉光

本誌六月號で高鷲亞鈍氏の「詩人複眼」中へレン・ケラー女史よりも、塙保巳一氏の方が豪いと論じて居られた。實に立派な論義である。世界的英雄のナポ

レオンより豊臣秀吉の方が偉いとは日本人としての見方ばかりではないものと信じる。

こうした意味で俳聖子規を、江戸ッ子でなくては川柳の眞の味が解り難いと論ぜられる久良伎翁とは別に、病む川柳家の「自己辯護」（本誌四月號參照）とはすこしくかわつた眼で眺め味ふ事も無駄ではなかろう。

「悟りとはいつにでも死ねる事だと信じてゐたが、死んでも死ねなぬ決心が誠の悟りである事を知つた。」と云ふ意味の事を、子規はその隨筆に書いてゐる。

楠氏の七生報國の精神として考へ直して見ても好い事である。

路郎先生も病む小生への言葉に「病氣を無駄にせず苦しみを味ふこそ天が君に特に與へた使命である」と云ふ意味の餘い教訓を貰つた。長期戰、代用品時代の銃後として味つて好い言葉であると信じる。

さて子規は病臥するまでに惠まれた人生體驗によつて、小說を書き、詩も創り、短歌をも論じてゐる。そしてその隨筆は、病床六尺に歩行の自由を失ひ、ラヂオ、映畫、雜誌、等の文化的なものに接しなかつた不倖せは、ある意味では、幸福ではなかつただろうか？　現在の如く病んでゐても多忙な時代からは

懷かしく街で田園を懷かしがる氣持がする。

その時代は子規だけでなく、現在の樣な日本文化のあらゆるものゝ再認識時代とは違ひ、西洋文明開化思想の鵜呑時代で、表面的に見る寫生、模倣時代で新興革命時代だつた。

だから怒るか、泣くか、溺れるかの時代だつた。子規の熱血と闘志は病むとも强く、舊派の俳諧を酷落した。そして美術、藝術、音樂に對しても、これに似た考へ方を持つてゐた事は、子規の隨筆を讀めばよく解る。それがあまりに强すぎて自我的な考へ方を私生活に迄入れて、愛情の深い母を泣かし、妹を罵りつゝ自分自身をも呪ひつゝ泣き叫んでゐる。

あまりにも俳句的な花鳥風咏に忠實過ぎて、短歌の詩的な人情は悲哀にのみあるかの如く信じ、笑ひの中にある泪の人情哲學を見る事が出來ず、小林一茶をもユーモラスな作句家ぐらいに考へ、笑ひの文學はすべてが低級と信じて疑なかつた樣に見える。その子規と親しかつた夏目漱石が「我妻は猫である」等のユーモア小說を書き、俳句を作つてゐる。

菫ほどな小さき人に生れたし

叩かれて晝の蚊を吐く木魚かな

肩に來て人なつかしや赤蜻蛉

等の句は何を語つてゐるのだろうか？　これは漱石論になる事であり研究すべき事であるが、日本の短文學に大きい土產を殘して逝つた子規は、自由律俳句作家の尾崎放哉、短歌の革命作家の石川啄木以上に、人間として精神的に不幸ではなかつただらうか？

颱風へ糸瓜必死の姿なり　葉光

一萬圓

酒井斗風

プロ球界の王者タイガースの花形投手某君を、僕はちよい〳〵見るが、見る度に思ふのはあれが一萬圓投手かなあと、見直した時。路郎先生の句

一萬圓フランと云つて草に寢るにはなれない僕だ。其の理由とは某君がまだ關西大學黃金時代の花形として活躍をして居た時タイガースから入部を交渉したが話にならず、色々さぐつて見ると、ある先輩の斡旋で川崎コロンビヤに、入社と決つてゐる事が分りタイガースもあきらめたが、諦きらめきれないのはタイガースのマネジヤー中川氏。直接本人にお百度をふみ、意嚮を聞くと、一萬圓ならとの話に中川氏はスーツと無言のまゝ歸つたので、某君は心のうちでタイガースも一萬圓には驚いたなと想ひ、惡友連と道頓堀の或るカフエーでメートルをあげてゐる所へ、中川氏が汗をふき〳〵たづねて來て拾圓札で一萬圓也を積み上げたので某君も二言とは云わずタイガースへ入部したのだとの、馬鹿に景氣の好い話を、某君の友人であり、學生時代これも野球の選手であつた從弟のKに聞き、なる程なあーと感心して從弟にジョッキをおごつてしまつた僕は、路郎先生の句

一萬圓哀れはけなるがるばかりに共鳴をする次第である。

（七月二十二日）

眼複人詩 (4)

高橋亞鈍

逆說のモラルA

或日、地球を直線に掘り下げてゆけば、丁度反對の裏側に出てしまつた。當然裏側の地球面から考へると頭より脚の方が先に明るみに出なければならない。ところで裏側の地球に住つてゐる碧い眼玉の人間共は地下より現れた人間の脚が、漸やく地上に現れるか現れぬトタンに、その脚首を把へなければ、再びその男は地上の明るみに引出す事は不可能であつた。

幸ひ、その男は地球面に引上げられた。黑い眼玉の矮少な人間族であつた。不思議なことにこの男は地球上に現れても滅多に頭を空に向け直さうとしないばかりか、手で地球面を押へつけ、脚は二本共空に游がしてゐた。しかもこの男は豪然として言ふ。

「君らは逆とんぼりして歩いてゐるね。」

すると、碧眼の男の一人が言ひ返したものである。

「では君は御天道さまを拜めるかい」

で、黑い眼の男は再び昂然として言ひきるのである。

「何に、俺は、おまへ達の國の空が何處にあるかも知つたものかい御天道さまは、今俺が出てきた地下を掘り下げれば拜めるよ。」

以上のことは大體に於て黑い眼玉と碧い眼玉の人間の位置を逆に考へても成りたつ御伽話である。

逆說のモラルB

赤鉛筆が出たり黑鉛筆が出たりするヴァンコペンシルを使用してゐる男が突然笑つて曰く。

「男性の神秘も、これだ!!」

しかもモナ・リザの微笑以來女性の神秘をよう解き得ない詩人達は、女性の肉體の一小部分の個所にある二點が簡單極まるものであることに御存知ないことから生ずる謎であつた。けだし男性のそれは、分解不可能な機械を藏してゐるものを、女性の智慧では計り難いことである

逆說のモラルC

鏡の中の人生は繪入模樣、極彩色で美しい。人間は誰でも、其麼鏡を持つてゐる。その鏡は各自それ〳〵に持つてゐてその持ち扱ひ方如何によつては、鏡にうつる人生に繪が入り、或ひは魍け、損ずることになるのだ人生が、悲痛になり絶望を感じ不安を覺えるのは、つまり自分の鏡が破損してゐる事を知らずに、鏡の中の人生をみて鏡の中に人生があると信じ込むところからくる錯覺である。例へば猿が鏡の中の猿をみて、鏡の中に猿がゐると思ひ込むのと同じやうに。

死は完全に自己を喪失する。自己を消して了ふ。けれど實際の自己は存在してゐるのだ。何故なら死は自己を映す鏡が無くなつただけの話で鏡の中の自己の喪失は實在の自己を決して消しはしないから。自殺者は要するに鏡の中の自己に拳銃を發射したまでだ。鏡の破壞、と同時に鏡の外の自己は尙存在する。

問題は鏡を人間が持つてゐるところに人生の錯覺がある。鏡をいまより捨て去る可し。換言すれば心を捨て去る可し。神をみる目はそれ故に無くなるだらう。しかししかし、その場合の人間は既に神樣である。

寫眞說明（上）プライマリー機上の路郎主幹（中）セコンダリー機の快翔（下）小田滑空士の臨地講話を聽く見學團一行

ツーポスの空

會柳川學見ーダイラグ

主催　社誌雜柳川

★地上と水上を完全に征服したスポーツマンは更にグライダーによつて空中征服を企てた。そしてドイツに於いては滯空三十四五時間のレコードさへ保持するに至つた。事變下に於けるスポーツマンの精神的緊張はいやが上にも高昇した。

★たま／＼帝國飛行協會大阪地方部主催のグライダー講習會が盾津の陸軍飛行場で開催される好機を掴んで我が川柳雜誌社では七月二十四日午後一時から同飛行場に於て見學川柳會を開催した。常に川柳人は社會事象の底邊に或は尖端に觸れんとしてゐるだけに路郎主幹をリーダーとして、東魚豆秋、變人、綠雨、たけを春古、潮花、水客、伊佐緒芳醉、ライト、なつ江、南鳥、忠數、忠雄、葭乃、アートの人々が馳せ參じた。

★飛行場のバックは生駒連山だ。草原の一隅には飛行隊員の寄宿舍がある。講堂がある。隊員食堂がある。航空旅館がある。格納庫がある。鳥人ならざる我等の魂さへ勇躍せざるを得ない紺碧の空は一段と高く仰がれた。

★一行は飛行隊員食堂で晝餐の後、格納庫に集合、遙にグライダーの快翔するを眺めながら、帝國飛行協會大阪地方部主事本多大佐の飛行機並びにグライダーに關する講話を拜聽した。講話は頗ぶる簡にして要を得たものであつた。

★軈てアカシヤ木工株式會社グライダー部の中村武則氏に導かれ、草原を横切つて、練習機眞近へとすすんだ。地上一帶は脛を沒するまでの雜草だ。一行の一足一脚は叢の蝗を驚かした。胸に袖に飛び散る蝗は炮烙から跳ねる煎豆さながらの感觸だ。文明は自然の美を抹殺するものとのみ考へてゐた視野の狹さを今更の如く思はされた。

一行は三々伍々草に踞つて、作句するものもあり、講習會の教官一級滑空士小田勇氏のグライダーの臨地講演に操縱の妙味を知らんと傾聽するものもあつた。

★グライダーは上昇氣流を利用して滑空するので飛行機との違ひはエンジンがあるかないかの違ひに過ぎない。グライダーにはプライマリー機、セコンダリー機、ソアラー機の三種がある。グライダーの滑空は滑空人一團の協力に依て行はれてゐる。操縱者が交代するたびに「準備ようし」といふ掛聲が聞える。それに續いて數名の者が又「ようし」と呼びかへす。其掛聲の中にやさしい女性の聲の交じつてゐた事を一行は見逃さなかつた。ユニフォームに包まれて右手に翼を支へて立つてゐたのはまぎれもなき一女性であつた其雄々しいその姿を、秘かにたのもしく感じたのは、恐らく日傘のかげで句作してゐた閨秀作家達であつたであらう。

★一行は再び、隊員食堂に引揚げた。こゝで東魚氏の兼題「スポーツ」路郎主幹の「飛行場雜觀」の各披講があつて、講習會の人々の好意を感謝しながら引揚げた。

草の上で

於　盾津陸軍飛行場

兼題「スポーツ」森　東魚選

盜疊の耳へセーフの聲がする　たけを

補回戰其の一點へ夕陽さし　南　鳥

よいあたりラヂオへひゞく球の音　ライト

三振は頭をかいて引退り　たけを

一疊でデットボールは見得を切り　豆秋

一點の刹那を撮つた砂煙り　同

選手としての日灼けを騷がれる　變人

乘馬服銃後の色が少し派手　水客

バー上げて助走路夏の陽に光る　東魚

グライダー高瀨舟ほど引つぱられ　同

グライダーぎつちらこから敎へられ　同

グライダー井戸替と云ふ所作があり　同

席題「飛行場雜吟」麻生路郎選

グライダー地上で乘つて笑われる蜻蛉までみがるな盾津草の上　ライト

グライダーとあみの如くひつぱられ　葭乃

グライダーあれ／＼鳥もあの通り　同

滑空士用意の出來た聲をかけ　潮花

グライダーの女の素性きゝたがり　たけを

グライダー壹貳、壹貳と空青し　豆秋

おや／＼と云ふ飛行場蝗が居　東魚

グライダー押して戻つた潮汗を拭き　花

グライダーいなごの群を驚かし　豆秋

たけを

翼の影荒鷲の兒は一服し　豆秋

吹流し背に受け男々しグライダー　伊佐緒

草に寢て格納庫の屋根ひくし　水客

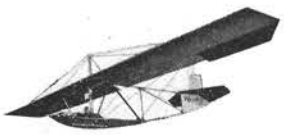
グライダー子供を連れて來るきめ　變人

飛行場靜に居れば蟲が鳴き　東魚

グライダー鳥へ羨む眼を投げる　路郎

ソアラー機都會の屋根が魔の如く

アカシヤ
グライダー



日本に於ける本格的なグライダー製作
飛行協會よりの補助金あり（手續申請詳細は御問合せ下さい）
大阪市阪急前曾根崎署南・電話北五九五八番
アカシヤ木工株式會社グライダー部

「川柳雜誌」創刊拾五周年記念

懸賞川柳發表

課題「洋裝」

麻生路郎選

▼川柳雜誌社十五周年記念事業の一つとして弘く懸賞川柳の募集をいたしましたところが、大變な人氣で應募總數實に三千七百二十九の多數に上りました。選者の嚴選を經て左の通り當選者を定めました。なほ特に弊社の催に贊し副賞を贈つて二重の興趣を與へられたプールブーに謝意を表します。（編輯局）

天位（賞金拾圓）

大阪市住吉區天王寺町三四四六　富岡巨人

洋裝の要らぬところに釦つけ

地位（賞金五圓）

兵庫縣武庫郡大庄村西字口開一八一　水谷鮎美

洋裝の影がフランス人形に似

人位（賞金參圓）

大阪市港區八條通り一ノ五　丸尾潮花

洋裝で出る夜ルージュの色もかへ

五客（記念品贈呈）

○大阪市　須崎豆秋

洋裝は大丸バテを拔いて行き

○松江市　榮吉

颯爽と來て預金するハイヒール

○兵庫縣　水谷鮎美

洋裝の座つてしまふ刑事室

○大阪市　後藤青兒

ハンドバックは摑む洋裝

○名古屋市　稻垣正穗

洋裝をけなした母の簡單着

十秀（記念品贈呈）

○東京市　濱野六羊生

洋裝の啞と見えない首飾

○大阪市　夷一笑

洋裝にせよとひらけた主人なり

○朝鮮　堀川化堂

當然の樣に洋裝座をくづし

○大阪市　佐竹香附子

どう見ても女史といひたい洋裝だ

○山口縣　森本苦樂人

ワンピース女心を抱いた胸

○大阪市　橋本綠雨

心齋橋バンドがゆるむ歩きやう

○函館市　山田武士樓

ダットサン洋裝の娘が先に降り

佳作

○仁川　植野知加志

洋裝のマ、と呼ぶにはあどけない

○宮城縣　遠藤北雷

洋裝になればよかつた向ひ風

○豐中市　駒澤榮二

洋裝の思想を問へば日本主義

○大阪市　石島正夫

輕快な洋裝でゐて働かず

○大阪市　柳大門

洋裝が釣りの一錢輕んずる

暑中御伺

川柳雜誌社　社員一同

○明石市　加藤連城

座蒲團へ洋裝すねた型になり

○長野縣　高峰柳兒

洋裝へ肥る惱みを持續け

○兵庫縣　長崎柳秀

洋裝は蜂そのまゝの腰になり

○大阪府　青山茂

夏だけの洋裝板についてる氣

○東京市　松永正記

洋裝の婦人今年も幹事なり

○尾崎　酒井美知夫

洋裝は一直線に行く姿

○大阪市　竹內春坊

洋裝の膝へ晝寢のペルシヤ猫

○今治市　田窪石鐵

洋裝はマネキンにたつ間だけ

副賞（婦人背廣一着　白ピツケ地仮縫付　別誂仕立）

フジンフクノイエ・プールブー寄贈

當選句

名古屋市南區野立町七畝割二一六四　稻垣正穗

洋裝をけなした母の簡單着

選者の言葉

▼斯うした應募句に類句の多いことはまぬがれませんが、少し類句が多すぎはしないかと思ふほど類句が澤山ありました「洋裝」といふ限られた狹い範圍ではこれも無理はないと思ひました。

▼天位の「洋裝の要らぬところに釦つけ」（富岡巨人君）は洋裝といふものの虛を突いたかたちです。ほんとに輕い見つけどこです。無闇にひねつた句より面白いと思つて、この句を天位に据えました。

▼地位の「洋裝の影がフランス人形に似」（水谷鮎美君）は美といふ點に中心を置いた句の上乘なものとしてこれを地位に選びました。纖細な美しい感じが句を通して流れてゐます。

▼人位の「洋裝で出る夜ルージュの色もかへ」（丸尾潮花君）は女としてそうもあらうかと思はれるところを見つけてゐるのに敬服させられました。

▼賞金並に記念品は發表後二週間以內に發送いたします。

▼なほフジンフクノイエ・プールブーから寄贈せられた婦人背廣服は上記の通り名古屋の稻垣正穗君が當選せられました。

ソボリンに頭痛

◇…**ソボリンの主藥たるピラツオロン誘導体（ボンピリン）及びバルビタールとアミノピリンとの分子結合体は個々の總和よりも著しく強大なる鎭痛鎭靜作用（相乘効果）を發揮する。**解熱消炎作用も強力で相加され且つ持續性が有る。

◇…ピリン劑のやうな藥疹なく、嫌な發汗や副作用が起らない。

◇…服用量が少くて（一回二錠、一日二回）効能が正確に現はれる。神經質の人、婦人、老人にも適し結核性微熱に好適する。

【ソボリンの主効】

感冒、頭痛、頭重、齒痛、神經痛、月經痛、扁桃腺炎の疼痛、神經衰弱、ヒステリー、船車暈、結核性微熱等。

（價格）四錠入（八〇錢）八錠入（吾錢）
二〇錠入（一圓）五〇錠入（二圓）
（各地の藥店にあり）

發賣元　株式會社　武田長兵衛商店　大阪市道修町

武田發賣

★柳人素描

(三〇) 池田可宵君

興衰常ならざる朝鮮柳壇の一異彩として可宵(かしよう)、池田正雄君は不斷の努力を續け新聞柳壇の擔當、隨筆の執筆等に寧日がない。今春曾て「長鼓」を刊行してゐた仁川川柳社を脱退した君は高麗川柳社を樹立し、これが主宰者として月刊「高麗」を刊行し、朝鮮柳壇に君臨して、仁川川柳社を顔色なからしめてゐる。業務方面に於ても長軀を一臺のオートバイに托して飛躍する少壯實業家だ。

君が川柳の門をくぐつたのは大正九年の十二月だそうだ。

孝行を仕損じてゐた驛へ降り
師匠もう老ひたる哉と思ふなり
親馬鹿も承知の上の局の窓

がその作風である。

君は明治三十四年十一月十日、山口縣都濃郡に生れ、現在は仁川府宮町で呉服商を營んでゐる。川柳外の趣味としては讀書、琵琶、詩吟、オートバイ、政治等々々。別號には法正山旭芳。高麗川柳社同人、川柳人協會名譽會員。

(三一) 植山九天君

九天(きうてん)、植山義隆君は大阪鐵道局から、廣島鐵道局開設と共に轉じた少壯官吏のチヤキ〳〵である。川雜大鐵局支部を牛耳つてゐた君が濱田久米雄君等と廣鐵に轉ずると共に廣鐵局に川柳が勃興した。ガツチリした體軀の持主で、仕事は仕事、趣味は趣味として實に朗らかに行動する。最近、鐵道省から遠く支那に

久良伎翁古稀祝賀記念品贈呈に就いて

日本柳壇の耆宿坂井久良伎翁(川柳人協會名譽會員)が齡ひ古稀に達したことはまことに慶賀に堪へない。

翁は資性穎敏直情の人私財を投じて多年、柳壇のために貢献されたこと

は何人もよくこれを知る。

茲に我が川柳人協會は古稀祝賀記念品贈呈資金を普く天下柳人に募る事とした。左記小規に據り御賛同を乞ふ。

一、記念品贈呈資金は一口三拾錢のこと(幾口でも申込んで下さい)

一、屆先は大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地 川柳人協會。(記念資金拂込みはなるべく振替大阪三一五一四番を利用されたい)

一、詳細は前々號參照

川柳人協會

☆贈呈者御芳名

一口 吉田水車君(名古屋)
五口 石崎柳石君(今治)
十口 榎田竹林君(靜岡)
五口 落合樂瓢君(同)
五口 森雉牛子君(大阪)
五口 石田默天君(同)
三口 川雜梅田支部殿(同)

締切迫る!

愈々最後の締切日八月三十一日が二旬の後に迫りました。何分の御高配を煩はします。

★川協會員を募る

川柳人協會も皆様の御後援により日に月に發展しつゝあります。「入會案内」御希望の方々は左記協會宛に御申込み下さい。

會費一ヶ年 參圓
半ヶ年 壹圓六十錢

大阪市西區江戸堀上通二丁目四十六番地
川柳人協會
振替大阪三一五一四

一路集

募集句

記者

濤明選

悠々と砲煙彈雨にペンをとり　九呂平
カフエーで俺は記者だと嘘を言ひ　柳星
顏色の動きを記者は見逃さず　形水
友人にスポーツ記者があつてよし　水客
平凡な事へも記者は寄つて來る　市多樓
雜誌記者今日スタヂオの實に居る　潮花
プラットへ何があつたか記者のむれ　悠起
人殺し記者は素足で飛んで來る　一醉
車中談記者は急所に觸れたがり　比呂志
ゆすりかと言ふ顏をして記者に會ひ　風葉
ザラ紙へ記者無雜作に書きなぐり　紫香
戰線に記者も勇士も一所の苦　哲志
ニュース畵で兵士に交る髭の記者　山尾
記者の眼に障子が破れ壁が落ち　春月
ねたましい戀に出會つた婦人記者　謙南坊
武勇傳記者感嘆詞言ひつくし　半休
浴衣着て記者は特ダネ見つけたり　葉留路
演說のうまさやつぱり記者でせう　いづむ
三面記事拾うて場末で呑んでゐる　鴨路
下駄ありし場所まで記者は書き立てる　曉明
ライバルは記者で此の戀面白し　毬夫
何かある嵐の前の記者倶樂部　同
秘密會よもやと思ふ記者に知れ　不水
從軍の記者或時は應戰し　同
從軍記者始めて記者へ感謝する　みどり葉
婦人記者後姿の若さに居　同
莊嚴の中に記者の目油斷なし　文庫
記者ある日燕尾服なご着用し　同
沒になる記事を新聞記者も書き　葉光
日本語で外相外人記者集め　同
(五)記者さまと拙ない文字で打ちあける　木公
(五)出征の氣持ちで記者も支那へ立ち　風葉
(五)特ダネに締切時刻迫るなり　石鐵
(五)流行語作つて記者の面白し　春巢
(五)記者の瞳は事あれかしと動いてゐる　芳泉
(人)婦人記者それから先が押切れず　水客
(評)それから先きを聞くのが職業であつても流石は女である。
(人)少々は嘘もあるらし記者笑ふ　曉明
(評)筆の勢い、又は記事の興味化にはいくらか記者の創作加はるであらう。
(地)犯人の親に泣事記者は聞き　謙南坊
(評)よく有りそうなこと、犯人の親はやはり人間であり、凡夫である。罪の我子にせめてもの愚痴、泣き事は記者も聞いてやつてほしい。
(天)雜誌記者人の過去までのぞきに來　潮花
(評)中七の着想が老練である、よき人も惡き人も過去を書いて記事に興味が湧いてくる。

愛人

鮎美選

日曜に愛人がある張り切り樣　風葉
ネクタイを送る彼氏を瞳に描き　しとし

派遣されて鐵道方面に活躍してゐるのも故なきではない。

君が川柳をはじめたのは昭和八年一月十四日だと聞く。

おあいそに抱いた子眼鏡とりにくるどうかなるだらう日向で子と遊ぶ

ペン軸をかみ將來にふれるなり

これが君の作風である。

君は大分縣下毛郡三保村字福島の產、明治三十八年八月十二日生れだ。霜葉の別號をもつてゐる。川柳外の趣味としてはスポーツに撞球、圍碁に麻雀などである。川柳雜誌社廣島支部同人、川柳人協會理事。

（三二）楊柳夢君

楊學泗（ヤンガクシ）君は前清光緒三年五月五日（明治十年）に中華民國天津に生れた。現在は高松高商に奉職、奏任五等待遇の先生である。「大地」の著者パール・バック夫人がアメリカで生れたといふだけで、眼の碧い支那人だと云へるほど支那生活になづんだやうに、我が柳夢君も、

日本の空氣を呼吸することに於て、日本の生活を生活することに於て決してパール・バックに劣るものではない。この事は君の川柳が何よりの証左である。

君は俳號を寒芬と號して俳句すらものする。

君が川柳するやうになつたのは大正十三年四月だが、「川柳雜誌」を讀みはじめたのは百號からだそうだ。その作風としては

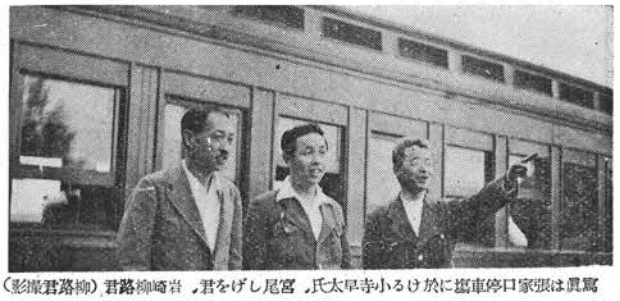
人生もかくやあらんか蠅取紙

浪人の心機一轉旅に立ち

秋風に年增の素足細く見え

に見ることが出來る。これ等の句を見ても君が人生勉强の凡ならざることが知れやう。川柳外の趣味としては謠曲、圍碁、書畫、金石文字、讀書、食道樂をあげることが出來る。所屬吟社は川柳雜誌社。川柳人協會正會員。著書としては初步清語教科書（絶版）支那語教材（現行）詩文集（未刊）等がある。

愛人と別れ電話で言ひなをし　みどり葉
愛人の日傘がきりり〳〵舞ひ　春月
愛人があり郵便が氣にかゝり　文庫
愛人の今日もほゝ笑む片靨　九呂平
信じたくない愛人の噂なり　芳泉
愛人の手前負けない口をきゝ　石鐵
愛人へしみ〴〵金のほしい夜　葉光
愛人と逢ふひと時の俄雨　葉留路
パラソルに愛人と居て海近し　鴨路
愛人の門出千人針を縫ひ　悠起
愛人と逢ふ約束へ薄化粧　同
愛人を立たせて寫す橋があり　紫香
愛人のりんごむく手を見つめたり　同
愛人がありアパートに一人住み　斗風
灰皿と愛人今日も雨が降る　同
愛人へ讀ませる樣にネオンつき　謙南坊
愛人の父にくすぐつたくも會ひ　同
（佳）愛人の二階へ鹹で轉げ込み　形水
（佳）愛人は表情のいる怨み言　潮花
（佳）愛人のうしろ姿を見まいとす　春月
（佳）陽を吸ふた愛人の頰リンゴに似　曉童
（佳）愛人の日記にみんな寢しずまり　寄與史
（人）愛人の部屋へ這入つていゝ薫り　風葉
（人）愛人と歩く鋪道がたそがれて　水客
（人）赤襷もう愛人へ振り向かず　毬夫
（地）愛人の瞳にむけるカメラかな　哲志
（地）愛人に此の小說も讀ませたし　春巢
（天）これかけのほたん愛人（ひまちぎり）　南濃路
（軸）百合の花粉が愛人の掌にもつき　鮎美



寫眞は張家口停車場に於ける小寺早太氏、宮尾しげ子君、岩崎柳路君（柳路君影）

川・協

▼新名譽會員をお知らせいたします。

早川右近君（横濱）

▼北米シヤトル市日商ホールで七月三—五日まで開催された全米川柳展覽會は海外に於けるはじめての川柳展だけに頗ぶる人氣を博し、初日の入場者一千名を突破したとの快報に接した。

▼川柳みちのく吟社では創立二十周年記念全國川柳大會を八月廿一日（第三日曜）午後一時より青森縣黑石町公會堂に於いて開催、宿題の選者には、不浪人、三休、五花村、三太郎氏等が當られる、尙會費は五十錢（茶菓、粗飯付）で投句のみの方でも會費前納すれば賞品記念品等送附される由

▼滿洲から綜合雜誌が出るといふので大いに期待してゐたところが、相當に生みの惱みを續けて漸く八月一日「川柳大陸」の第一號が出た。「川柳大陸」は高橋月南、石原青龍刀、小林若八君等を筆頭に古豪新進五十名の同人組織でデビューした譯で、兼て提唱せられてゐたやうなオール滿洲の綜合雜誌ではないが、一躍滿洲柳界に重きをなすものであることは我等の意を强くするところである。今後の發展を祈つてやまない。

朝鮮唯一川柳誌
月刊 高麗 一部廿錢
仁川府宮町 高麗川柳社
振替下關一二二五八
電話 七一三番

▼月原宵明君の消息が二ヶ月程絶へてゐたので、君が武運の長久ならんことを遙に祈つてゐたが最近消息を手にすることが出來てよろこんでゐる

▼陣中の人々から雜誌の屆かぬ通知に接した場合には大いそぎで更に發送して何れか早く手に入る方法はとつてゐるが、何分戰時の郵便物であるから不達の場合もあらうと思ふので遠慮なく申越していただきたい。

▼なほ戰線の方々の住所は取締上、紙上に發表出來ないことになつてゐるので、留守宅住所を發表し、そこから知らして頂くか、希望者には本協會宛に問合はせて頂いてお知らせすることにしたいので、戰線の諸君も銃後の諸君もその點お含み願ひたい。

暑中御見舞申上候

本協會事務所を下記へ移し申候

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地昭和ビル內
川柳人協會
振替大阪三一五一四
電話土佐堀八一六三

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規清

一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
二、文字を正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月廿五日とす
五、投稿先は本社宛

雑川　廣島支部句會（廣島）

植山九天氏を支那大陸に送る

六月二日　於　廣島倶樂部

覺悟、開拓、唇、強い、女中

此の覺悟花の咲く日を祈るなり　一雄
覺悟したとも思はれぬ朗かさ　白外郎
出征へ妻も覺悟の日を送り　昇玉
丸刈へ君の覺悟のほども知れ　葉留路
死の通知母は覺悟の顔で立ち　昇玉
御用船二度と故國を見ぬ覺悟　葉留路
パラシュート負はぬ荒鷲輕くたち　紫浪
出征へ子は夕刊を賣ると云ひ　久米雄
父と子の云はぬ覺悟の赤襷　紫浪
大陸へ渡る覺悟の注射針　久米雄
開拓へ母國の空はかすんでる　白外郎
開拓の奥地へのびる日章旗　草雲子
開拓か祈願をこめる朝の露　ひさし
開拓の鍬が家寶として繼がれ　昇玉
開拓のある日故郷の歌が出る　九天
開拓は國境の空近く見て　麥作
唇の思はずふれる子の額　至宏
ハイヒールルージュの顔がきつすぎる　一葉
唇を噛めば故郷を忘れたり　九天
唇をなぶて舊師は語をつぎぬ　同
度の强、眼鏡をかけて甲種なり　麥作
理屈など抜きで手强く押して行き　至宏
最後だと思へば强しこの握手　同
女中今日國婦としての肩を張り　九天

六月廿四日　於　廣鐵倶樂部

連絡船、時計、菓子、寫眞、音

感激を乘せて搖れてる連絡船　半休
旅馴れた夫婦連絡船で飲み　市多樓
連絡船子供デッキに立ちたがり　凡水
連絡船霞の島の影となり　草雲子
行く船に手を振りかざす連絡船　西山
連絡船とかくダイヤを亂し勝ち　麥作
連絡船かもめも旅の眺めなり　葉留路
霧、霧、霧連絡船にある不安　秋史
連絡の船で又會ふ二人連れ　日昨日
連絡船涙をかくす女あり　西山
連絡船同志日の丸振つて過ぎ　秋史
崩えさかる希望連絡船で搖れ　市多樓
連絡船接續を見る暇があり　白外郎
老人に連絡船が癇となり　靜香
連絡船しばし繪にして瀨戸は凪ぎ　秋史
ゴールインタイムウオッチは新記錄　白外郎
出勤に遲れ時計に罪をきせ　桂谷
置時計只重味のみ見せて居り　半休
鳩時計喫茶靜かに更けた音　秋史
一秒へ自信を持つたウオルサム　九呂平
行樂の春へ時計を忘れたり　久米雄
一つだけ打つて午睡の又靜か　かなめ
無事だつた夜へ時報が鳴り終り　久米雄
洋菓子へ母は氣不味い顔になり　同
佛壇へあの子が好きな菓子を添へ　白外郎
菓子鉢へ主客は威儀を正したり　久米雄
クリスマスケーキへ惜しいナイフ入れ　葉留路
御紋菓を戴く勇士うらやまれ　昇玉
菓子袋もうこれきりと底を見せ　市多樓
佛壇のお菓子を子供見つけたり　草雲子
アルバムへ亡き人思ふことしきり　久米雄
祖父さんの面影がある子の寫眞　一葉
黑星の刹那をカメラ見逃さず　秋史
黑枠の中に無言の父がゐる　葉留路
シャッターへ虫も殺さぬ顔になり　久米雄
足音を又叱られて女中降り　秋史
プロペラの音は世界を寒がらせ　昇玉
春の夢目覺しの音うるさがり　白外郎
靜寂を破るはペンの走る音　昇玉
鐘の音旅愁は猪口をぐつと干し　久米雄
どの音も銃後を意識したひゞき　同
默禱へ電話のベルの大き過ぎ　彌山
靴音も高らかに入る敵の首都　麥作
白い石自信に冴えた音で打ち　彌山
戸締りへさつきの音がふに落ちず　秋史
お茶漬の音へ病人氣が尖り　同
父親の歸る氣配を子は悟り　草雲子

雑川　鶴町支部句會（大阪）

七月三日　於　加藤ライト居　加藤ライト報

誘惑、月給、冷藏庫、新妻、綽名

銃後なり友の誘惑輕くさけ　巨人
誘惑のある年頃を親と出る　松太樓
誘惑の笑顔へ男馬鹿々々し　ライト
月給をそのまゝ渡し膳につき　變人
氷屋に賞められてゐる冷藏庫　ライト
冷藏庫ビールの這入る給料日　双虎
冷藏庫隣りの刺身入れてやり　松太樓
冷藏庫裸になつた手であける　變人
新妻の娘心が拔けきらず　巨人
新妻の留守はキッチリ錠をかけ　松太樓
ニックネームこんなところで聞かされる　双虎
生ビール君の綽名のわけを聞く　變人

雑川　梅田支部句會

やなぎ會句報（その二）水谷鮎美報

文明

文明へ白う呼吸づくお茶の花　由布
文明にすねた姿の京の橋　秀峰
エンジンが動いた三人餓になり　卜居
テレビジョン君のぬけ齒が見えるなり　同
文明は通行税が掛るなり　斗風
文明にむかし變らぬ老舗もち　同
文明の水が光つた發電所　鮎美
文明の魚眼レンズのおもしろさ　同
スキッチはオフ・オン文明のゆまるし　同

松坂倶樂部句抄

物忘れ

惡戯を叱つてる間に物忘れ　伸一
約束の子にはすまない物忘れ　くもを
藥の名のどまで出でゝ思ひ出ず　耕二
肝心のとこで名前が口に出ず　くもを
東洋の支那は大きな物忘れ　同
物忘れする頃女房を大切がり　生々庵
物忘れあまり律義に仕舞込み　同
顔見れば知つて居るがと話をし　三華
物忘れするのに幹事よく當り　同
物忘れ煙草が二本三本目　伸一
物忘れ社長磊落に笑ひけり　同
物忘れ顔は佛に近き顔　路郎
物忘れ別に居眠つても居らず　同

阪大川柳句會（大阪）

丸島利生報

地下鐵、家柄、雜吟、銀行

地下鐵を出て方向をとり違へ　正甫
デパートをつないで地下鐵用が足り　利生
風邪ひきまつぢと地下鐵の窓閉められる　路生
いゝ話サブの響にかき消され　柳秀
母親はサブの匂ひが鼻につき　同
サブを出て俺はどつちを向いて居る　同
地下鐵で行く急がないお買物　春巣

長生同志地下鐵で話し合ひ　栞
地下鐵でデパート順にあさつてゐる　芳一
地下鐵で夜業のやうに勤めてゐる　同
交通禍他所に地下鐵つゝ走り　君女
デパートへ地下鐵で行く日曜日　千秋
地下鐵の話は身振り手眞似なり　同
名物にして地下鐵を紹介し　同　春巣
すし喰べに行く地下鐵が込んでゐる　楠水
地下鐵に借りた雨傘置き忘れ　たけを
地下鐵のもうこの邊は川の底　栞
家柄が心臟弱うさせてゐる　同
ござあますと家柄のつもりなり　路生
鼻にかける程の家柄嫁は持ち　春巣
家柄に似合はぬ洒落を云ふ主人　同
家柄へそれ献金だやれ寄附だ　同
家柄の娘に養子來手がなし　同
家柄を炊男は捨てゝ立つ氣なり　利生
そのかみは槍一筋の家とかや　同
社長の子、子爵の姫を貰ひうけ　同
軒下の龍筒水にもの云はし　同
家柄を茶筅に見せる里の母　柳秀
今はたゞ系圖を語る紋所　同
家柄はどうであらうといゝ緞縹　同
家柄を袱紗が語る内祝　正甫
家柄が格式がとて賣れ殘り　同
家柄が人氣を呼んでゐるスター　楠水
名門も遂に破産す不肖の子　同
家柄を恥かしめざる勇士出で　芳一
家柄と縁が組みたい金が出來　同
落ちぶれて村の助役になつてゐる　同
家柄を棟木に見せて世に後れ　同
家柄を家柄をと母の癖　たけを
玄關に槍を見せてる元士族　同
家柄を笠に娘を遣る氣なり　香附子
賣立てに見る家柄の支那陶器　春巣
士族と書いて老人顔をあげ　利生
氏、素性醉へばうるさい祖父であり　同
手花火へ今夜目がたい兄妹(フタリ)なり　栞

慰靈祭にて

英靈へ心からなる腰を折り　利生
萬歲を流し歡送の列は過ぎ　同
軍服で來る洗濯屋見直され　君女
支配人主人の金で客と飲み　柳秀
非常時にやぶれた服も銃後らし　同
事變下の工場揃ふてよく動き　同
志願して見よかと丙種思ふなり　春巣
戰爭に廢物利用教へられ　同
豹に似た心構へで眉を引き　路生
カン〳〵帽見せ合ふ程の暑さなり　千秋
二人二人二人とペンチ黄昏れる　芳一
生還を期せず日本刀と征き　同
代書人胃散の罐へ判を入れ　栞
緊縮へ女中お仕へにくいこと　君女
子澤山せんべいふみ飴をふみ　栞
大鞄抱いて護衛と日銀へ　筑川
銀行の通知に内密金がばれ　芳一
銀行員自分の金のやうに呉れ　柳秀
銀行に勤めてゐます養子なり　栞
銀行のひる合札の落ちた雪　路生
預けるにしては半端な金を呉れ　同
銀行へ行くをおふくろ苦勞にし　利生
三圓の旅費貰ふのに日銀へ　同
日銀も名所の一つと見て通り　正甫
銀行の開くまで待てぬ金のこと　同
銀行員キッチリ合ふて人の金　同
漸くに當座を開く店となり　同
銀行に縁がないのが自慢にて　たけを
銀行で小僧冗談云へるなり　同
銀行の窓へきこへる不義を討つ　同
銀行で景氣もきいて歸るなり　同
銀行へ藝者素足で用があり　同
札束を機械のやうに讀んで呉れ　同
退くとこへうるさい金を持つて來る　柳秀
銀行で藝者ほんまの名で呼ばれ　路生
取引もない銀行へ電話かけ　路郎
銀行へつとめ一人の母を持ち　同
銀行を逃ぐるが如し全拂　同

雜川　**今治支部句會**（今治）

七月二十二日　於　東洋文庫書房　渡邊曉童報

後援、代筆、持久戰

有名になつて後援會が出來　文庫
後援の名前だけ貸す新聞社　同
代筆は書きかけにして又尋ね　同
代筆は女らしさが欠けて居る　同
身代りに征き度い等と丙種云ひ　同
代筆を息子に頼み墨をする　平尾
持久戰妻は銃後の賃仕事　同
スフでゆけ丸刈でゆけ持久戰　石鐵
持久戰へ代用品がつぎ〳〵出　同
妹の代筆でくる母の文　心府
後援がなくて無念な三疊打　同
持久戰川を挾んで夜が白み　同
持久戰借金取りはなれてゐる　同
體位向上妻にゆるした簡單着　同
後援に名を借りられる名譽職　曉
代筆はいと達筆に誤字を書き　同
代筆のそれから先はまかされる　同
代筆の不覺名前の字をたづね　松調
後援を退りぞけて立つ快男子　同
持久戰ジリリ〳〵と押切る氣　同
歌麿のポーズではない夏座敷　曉童

雜川　**岡町支部句會**（大阪）

五月十四日　於　丸尾潮花居　丸尾潮花報

狸、大阪城、エプロン、懷しみ、
晝寢、風呂敷

瀬戸物の狸に水が打つてあり　一笑
あつけない顔で狸は檻へ入り　稔幸
動物園狸の化けぬを不思議がり　幸路
庭の隅まめだこけそうに立つてゐる　稔幸
まん丸い月へ狸が出て來そう　紫香
趣味人形狸は隅でこけてゐる　潮花
煙草の火狸が逃げたなぞと云ひ　悠起
餘程夜も更けて狸の出る話　松太樓
春風へ狸こまめに動くなり　水客
大阪城天主閣から明けはじめ　花蝶
生駒から大阪城を小さく見る　幸葉
天主閣遠慮のいらぬ聲を出し　水客
團體旗大阪城は小雨する　同
青空にくつきり浮ぶ天主閣　万的
大阪城まで來て背の子をおろし　愁花
大阪城まともに見える事務机　潮花
大阪城煙とぎれた中に立ち　紫香
エプロンを風呂敷にして娘は戻り　芳醉
エプロンをかけて閣下の前へ出る　草水
エプロンへコーヒのしみのある女給　一波
エプロンにネームを書いた喫茶店　雪春
懷しむ心眼鏡の玉を拭き　水客
甲板へ出て懷かしの山を見る　松太樓
晝寢又蜂の羽音が氣にかゝり　水客
子の晝寢金魚の水をかへてやり　同
風呂敷の古で自轉車ふいてゐる　紅多呂
風呂敷をひろげる迄のさはがしさ　變人
風呂敷をかゝへて村の驛をたち　春坊
風呂敷をほどかして見るいゝ土産　水容
風呂敷を忘れたまゝの終電車　風葉

雜川　**松江支部句會**（松江）

七月十五日　於　なにわ旅館　勝谷山川兒報

日の丸、汗、木綿、點呼

日の丸をみんな振つてる進軍歌　笑鬼
天を衝く一番乘りの日の丸や　山川兒
日章旗此所も日本の占領地　一湖
第一線唯日の丸の意氣と熱　大鳥
十萬の汗々々の甲子園　同
汗ふいて〳〵遲刻の申譯け　登美也
汗も出ぬ姿に見えてハイヒール　柳人
鼻の汗さりとは多産系の妻　梟人
打つ槌の響で落ちる腕の汗　紫薇花
叱るのも叱られるのも汗を出し　山川兒
ナフタリン匂ふ木綿の男前　大鳥

木綿着て西郷隆盛したふなり　山川兒
點呼から不平を持つて歸るなり　同
ゲートルがそろ〳〵ずりる點呼場　同

川雜　**塗青支部句會**（大阪）

大和二上山吟行　淺謙公報

七月十六日

汗、水、團扇、夏祭

夕涼み棒押しをして汗をかき　林京詩
復興へ今日一日の汗をふき　京詩
畠打つ額の汗の尊さよ　子之
屈强な手で背の汗を拭く峠　謙公
先づ馬の汗拭いてやる特務兵　京詩
軍服の汗へ國防あほぎ立て　同
水に流して飲むとしやうさ　子之
男の子水かけられて笑つてゐ　波田
生水を飲むなと母の便り來る　京詩
寢付かれぬ枕へ旅の水の音　光路
水打てば墓も言葉をかけたそう　同
午前二時母にすまない水を飲み　京詩
さつきから水ばかり飲んでゐる隅の客　謙公
寢苦しい蚊帳は團扇の音となり　光路
ふる里は畦の蛙も夏祭り　阪本
夏祭　見てゐる方も汗をかき　上澄
お渡りが少し崩れた氷水　謙公
夏祭　すむと氏神わすれられ　小堂
夏祭飲まねばならぬ客が來る　京詩

川柳あざみ會（大阪）

七月二十日夕　於　石川ひさみ居

池田悠起報

襟、コンパクト

約束が出來て襦袢の襟を變へ　浪子
一かけの半襟買ふに手間がとれ　美代子
妹へ刺繍の襟を喜ばれ　蘭子
襟の柄妻の若さをほゝ笑まれ　ふみ子
雨ふくむ夜風へ襟をかき合せ　悠起
おとがひを襟へおとして娘は惱み　ひさみ
誘惑を輕くはずしたコンパクト　君子
銃後です國產にするコンパクト　千鶴子
コンパクト男はそつと横へ向き　美智子
コンパクト出して待合室の隅　波矢子
コンパクト戀の疲れを寫し出し　悠起
コンパクト持つかつこうも女の子　ひさみ
コンパクト森の香りのきついこと　美佐子
噴水のとこで疲れたコンパクト　花子
コンパクトもう年頃になり切つて　よし子
コンパクト涙のあとを押へつけ　悠起

有恒川柳會（大阪）

五月二十一日　寺井鋭々報

吟行

盤台の章魚行儀よく坐らされ　鋭々
通天閣煤煙を見に上るとこ　同
足高蟹勇者のやうに足を張り　同
無駄口の急に沈まる御陵前　波夢造
貧弱な會席手品でつないでる　同
襟卷でない川獺へ足が向き　しげる
名も知らん魚のナント多いこと　乃武路
鐵の値で通天閣は見直され　路郎
通天閣高さの事を聞き直し　同
通天閣家出して來た人もある　路郎
水族館浴衣や帶の柄に見え　同
水族館おこぜと鼻をつき合はせ　同
水族館見てゐる方も口を開け　同
殿りがヤット追ひつく御陵なり　同
謹んで拜せば御陵たゞ蒼し　同
鮎の茶屋ちと面例な膳につき　同

五月二十四日

恪氣、鳥、やりくり

男の恪氣尙ほ見苦しゝ　平三
恪氣した甲斐あり今の氣樂さよ　同
惡友は恪氣の仕方教へに來　波夢造
「沈默は金」怖ろしき恪氣振り　同
あの歳で恪氣色氣と言ひかねる　しげる
古妻は諦め切つて麻雀し　跳二
老夫婦昔の恪氣が戀しなる　錦浦
鳥籠の下に紅茶の湯氣が立ち　鋭々
鳥籠がさしたで心機一轉し　同
轉居通知養鷄をしてゐるといふ　同
小鳥など飼ふ趣味が君にあつたのか　同
鳥よりもみじめな暮しする人よ　平三
文鳥の夫婦仲よく並んでる　乃武路
鷄に笑へといふは無理なこと　しげる
洪水の出る河原と知つて作をする　波夢造
遣繰りも大きな分は主人がし　同
いぢらしくも女房遣繰り誇る也　同
年末は隱居もチョット遣繰りし　同
合宿で遣繰り話一としきり　雨月
ナンキンを割つて遣繰ヤットつき　同
母の自慢また遣繰りの話也　乃武路
遣繰りが出來て浴衣に手を通し　しげる
あの手腕遣繰だけで惜しいこと　同
遣繰りを娘は知らず花を活け　鋭々
遣繰りに疲れた顏へ寒い雨　同
遣繰りをしつゝやつぱり酒は飲み　同
遣繰りをするより頭下げておこ　路郎
遣繰りにライカを提げて行く身分　同
帳付のところへ兎も角連れて行き　同

六月十四日

上役、下役、煽風機

おん供をカバンと共に二十年　雨月
ふんどしの握り加減で世を渡り　同
對照の妙を極めて鞠躬如　同
面白い奴ぢやと下役認められ　乃武路
下役を可愛がつても侮られ　平三
喜壽爺地位定まつて已れ知る　同
偏屈が邪魔して今に出世せず　錦浦
下役へ下役へ行く仕事なり　しげる
下役を連れて二次會愉快なり　同
下役がそもスマートな背廣也　鋭々
重役の前では喫まぬ葉卷なり　同
上役の夫人美し二度目とか　波夢造
下役の慘目歸るに歸られず　同
あの人の下にゐますと誇り顏　同
煽風機隣りに客があると知り　しげる
煽風機獨りに欲しい暑さ也　同
煽風機簾と共に倉を出で　同
煽風機で風邪を引いてる獨り者　雨月
店先の客へ押出す煽風機　乃武路
煽風機へ向ひビールは冷えてるか　鋭々
喫茶店のひる煽風機廻るのみ　同
煽風機の風は嫌ひといふ女將　同

川雜　**岡町支部川柳處女會**（大阪）

六月四日夕　於　星野秀女居

丸尾潮花報

帶締め、心配、和服、薄化粧

帶締を結んだとこへ尋ねて來　いそ
心配に又心配のふえる母　波矢子
心配な話になつて席を立ち　秀女
姉樣と好みのちがふ和服なり　秋子
若すぎる和服へ年をさゝやかれ　波那子
薄化粧湯上りの母若く見え　松徑
涙ぐむ思ひをつゝむ薄化粧　悠起

川雜　**竹原支部句會**（廣島）

四月廿四日夜　於　斗秀居

松井可笑報

寫眞、肉體美、雜

決勝へシャッターの音續くなり　芳泉
あの頃の寫眞へ思ふこと多し　旅人
もう一度彼女を立たす佳い景色　芳泉
戰死者の肌身に母の古寫眞　斗秀
近況へ元氣な寫眞添へて來る　朱雀
肉體美春のリズムに躍つてる　斗秀
年頃を頰の丸味に見せてゐる　芳泉
肉體美通りこしたる肥りやう　朱雀
騷音の朝へ小鳥が鳴いてゐる　同

五月一日　於　芳泉居

雀、罪、人間味、雜吟

子供等のあきらめ兼ねる雀の巢　芳泉
狙はれて居るとも知らず雀ゐる　同
お早うと云はんばかりの雀です　紫蓮
軒に來る雀に朝寢覗かれる　芳泉
雀鳴く朝へ女の花鋏　可笑

母ちやんと云つたんだらう雀の子　朱雀
病床の窓に雀の遊ぶ影　同　芳泉
圓滿に納めん爲の罪を着る　朱雀
甘言と知らぬ女の純情さ　同
毛虫だと云はれる彼も泣いてゐた　可笑
人間味だけでお金の無い生活　同
冷酷な意見の中の人間味　同
苦勞した書體で女から來る手紙　同
倦怠期だまつて朝の茶を沸かし　同

川雜　**下關支部句會**（下關）
七月十八日　於　下關鐵道職員集合所
多田市多樓報

プラットホーム、錦魚、釣、隣、浴衣
プラットで勝つて來るぞと勇まゝ　哲志
急行はプラットホームの塵を呼び　一角
プラットに段々小さき母の顏　愛泉
ホームから無言勇士へ默禱し　不水
金持つて來る父ホームで迎へられ　巖
プラットで幼き兒等も手を合せ　春美
プラットで丙種は軍歌歌ふだけ　余志雄
金魚でも浮かしてみたいこの暑さ　殘月
猫の子は鼻打ちつける金魚鉢　一角
硝子鉢小さな金魚太くみせ　去來
喫茶店金魚も一役務めてる　哲志
金魚賣晝寢の夢を破つたり　泰山
飼方を金魚が死んで讀みはじめ　余志雄
金魚屋は水をもらつて一つ添へ　秀峰
金魚の尾引ずるように泳いでる　比呂志
金魚屋と金魚屋辻で行違ひ　不水
夕涼み子に誘はれて金魚釣り　氷川
名月へ金魚も寢ずに泳いでる　市多樓
釣天狗今日はどうやら空らしい　山尾
釣に來て先着のビクにふれて見る　市多樓
父さんの釣を見くびる家内中　秋史
趣味といふ狂人海に糸をたれ　半休
動いてるウキへうるさい第三者　秋史
母の日もついぞ忘れて釣仕度　市多樓
釣上げた時生活は忘れてる　比呂志
商人は隣のことも言つて賣り　山尾
瓜の蔓よその畑と知らで伸び　余志雄
隣から迷惑な留守たのまれる　市多樓
お隣のニュースへ皆を默らせる　半休
連名に隣の書體まねてみる　余志雄
陳列の浴衣へ夫婦もめてゐる　市多樓
催しに同じ揃ひの浴衣がけ　哲志
浴衣着て四五年若くみて貰ひ　市多樓
子等をみな浴衣で出して息をつく　苦樂人
國策でピンと騰つた浴衣の價　余志雄
一枚の浴衣で通して氣樂なり　山尾
歸省して父の浴衣が短かすぎ　秋史
肩書もみんな落して白浴衣　苦樂人
買つて來て仕立てた浴衣氣に入らず　愛泉
浴衣着て今日の苦勞を忘れたり　秋史

松坂倶樂部句抄

小兒科、襯衣

小兒科の順を母親待ち切れず　白面人
母性愛泌々と見た小兒科醫　同
口癖にもう濟むと云ふ小兒科醫　同
小兒科へ母學校のことも云ひ　同
小兒科を出て約束の玩具店　同
童顏であの小兒科醫はやつてゐ　美根子
砂遊びすゝめて歸る小供醫者　同
母親の教育として小兒科醫　同
路傍で脈も見てみる小兒科醫　同
小兒科は母が診察うけるやう　孤篷
小兒科の歸りに今日も買はされる　同
この俺が鬼手佛心と小兒科醫　生々庵
小兒科へちと氣兼した肌をぬぎ　同
この双葉あの双葉小兒科の責も重し　くもを
醫術より話術上手な小兒科醫　同
この土地に來て小兒科も始めだし　不光
託兒所の樣なり朝の小兒科醫　路郎
母の脈子の脈醫者ももてあまし　同
小兒科醫おもちやの趣味も少し出來　同
手遲れを殺されたとも母おもひ　くもを
衣紋つくらねば見えぬシャツお見え　同
シャツ一枚になつたが鍬の重い事　同
シャツ一枚天與の夏に暮しよし　同
そも〳〵の事言ふベイとシャツまくり　同
シャツ着ても着物を着ても父は父　同
訪へば二度目にシャツが起きて來る　白面人
出張所襯衣一枚で事務を執り　同
襯衣だけになれと馴染のありがた　同
考へた末はシャツでもあげやうか　同
重役の開襟を見てほつとする　孤篷
アパートを出た洗濯屋シャツばかり　同
父と子と同じサイズの襯衣を買ふ　同
汗の襯衣惡らしげにぬぎすてる　美根子
癇性の女房襯衣にも糊がすぎ　生々庵
肩がどうとか云ひながら父の襯衣　路郎

阪大川柳句會（大阪）

丸島利生報

提灯、十錢、雜吟、西瓜

病人が岐阜提灯を淋しがり　春巣
陷落は間近いと見た提灯屋　同
眞先に提灯を切り主を斬り　利生
提灯屋原稿通り誤字を書き　柳秀
提灯屋なでんこをする癖がつき　同
提灯の一つが燃える運動會　同
肩にかつげば提灯も重たさう　路生
新盆の提灯つればかなしかり　千秋
提灯屋子供の影が邪魔になり　たけを
懷しき定紋入の灯は迎ふ　筑川
バルコニー紅提灯で答禮し　楠水
破れ提灯朝露に見る面白さ　栞
提灯へ書けばおつさん字が巧し　春巣
一生を提灯持ちで死んで往き　たけを
感激を振れば提灯燃え上り　春巣
ナンボ落ちましたと十錢玉探され　栞
殘り十錢となつた淋しい旅の空　筑川
あの頃の十錢はと感慨無量なり　同
十錢でも國策に副ふ貯金なり　同
十錢が財布に殘るさみしさだ　千秋
十錢をまける算盤持たされて　たけを
墨色屋十錢だけの嘘を云ひ　路生
十錢で一時あづけの荷を貰ひ　柳秀
十錢が盆にぬれてる氷店　同
神戸まで十錢本を讀み終り　香附子
二次會の言譯十錢すしをさげ　たけを
たゞ會へただけがてがらの記者であり　栞
樟腦の臭ひは男にも分り　春巣
毒舌に慣れて外交年を取り　同
日ぐらしは金屬製の聲で鳴き　千秋
貯金報國は妻にまかし切り　たけを
水害地雜感
雨降つて地固らぬ事も知り　香附子
飜譯の兄を思ふて嫁きをくれ　柳秀
榮進を約束されてK轉任
頂上も見えて嬉しい八合目　利生
四十も過ぎてノータイ、ノーハット　同
汗で稼げば子は海に行き　同
コツテ牛奴隸に似たる眼をもてり　路生
お渡りへ勿體ないがアッパッパ　たけを
おしぼりに續いて西瓜運んで來　筑川
打診して西瓜をちぎる青物屋　正甫
たな落ちの西瓜の樣な男ゐる　芳一
海水の歸り氷西瓜へ氣が揃ひ　栞
西瓜上げる時から子はつきまとひ　同
切り西瓜齒型をのこすうまさなり　千秋
來客へ切つた西瓜は甘くなし　同
お愛想で喰べた西瓜をまだすすめ　たけを
水臭い西瓜へ禮を云ふて去に　同
西瓜喰ふ勇士もニュースに撮され　同
西瓜盜大きな奴を落しとき　利生
西瓜小屋眞晝も蚊帳を吊つてをき　同
スプーンで召す黃西瓜はしなつくり　同
喰ふた〳〵と西瓜の腹は撫でられる　路生
ゑびで鯛釣る氣西瓜を下げて行き　同
食堂の西瓜は安くあつかはれ　同
肺患のやうに西瓜はたゝかれる　柳秀
西瓜切る母は裸體にとりまかれ　同
請け合ひの西瓜ですよとをいてゆき　同
一舟の西瓜が溫う殘される　栞
まづこの通りと西瓜を二つにし　路生
西瓜一つさげて四五日泊りに來　橙含

忌柳川

（主催　川柳雜誌社）

戰死柳友慰靈祭

（主催　川柳人協會）

▼初代川柳は名を勇之助、姓を拇井と云つた。後、勇之助を改めて八右衛門と稱し、俳諧の號を川柳と云つた。

八代將軍吉宗公の治世、享保三年戊戌に江戸で生れ、十一代家齊將軍の治世、寛政二年九月二十三日に七十三歳で長逝された。

▼我社では柳祖の偉業を追慕するため年中行事の一つとして川柳忌句會を開催することになつてゐる。本年の九月二十三日はその百五十回忌に相當するので單なる句會にとゞめず佛事を修したいと思つてゐる。

尤も我が社の川柳忌は先人崇拜といふ單純な意味からでない事は本誌の第二卷にもこれを說いた通りで、私達の川柳がどんなに伸びて來たか、果していのちある句としての伸び方をしてゐるか、これからどんな傾向に伸びて行くべきであらうか、靜かに考へて見る日としてこの川柳忌を修して來たのである。

▼我が社の川柳忌句會開催の日は未だ決定してゐない。忌日に營むことが出來れば一番いゝと思つてゐるがこれは集會の都合もあることなので何れ句會部で決定次第御案內を差上げることとしたい。

▼なほ事變勃發後、一年有二ヶ月、その間皇國の爲、聖戰に參加された柳友は數ふるに遑がない。從つて無言の凱旋をされた勇士もゐられるので川柳人協會ではこれ等の戰死柳友の慰靈祭を、この川柳忌の時に併せて修したいと思つてゐる。

しかし全國の戰死柳友の戒名その他について詳細を知ることがなか〳〵至難であるから柳友諸君は無言の凱旋柳友をこの慰靈祭に一人でも多く招き得るやう、氏名、雅號、生年月日、戰歿月日、戒名、御遺族等をお知らせ下さらば幸ひである。

（川柳忌並びに、戰死柳友慰靈祭を前にして　路郎生）

川雜八月例會

は例年の如く休會いたします

（幹事）

▼會て私達は川柳忌が、もつと全國的に行はれることを希望してゐたが今日では殆んど川柳忌を修せぬ吟社が無いだけに一般化されて來た。これは川柳そのものの社會化が必然的に川柳人の心を誘導した譯であらうが、これを提唱して來た私達は云ふまでもなく、川柳そのもののために慶びとするところである。

川柳　**しなの**　郵一部十五錢 別稅

隨筆家や藏書票蒐集家の有名な顏ぶれを見ても特異性のあるうれしい柳誌です。御講讀をおすゝめいたします（石曾根民郎）

發行所　松本市大名町　**しなの川柳社**

暑中御伺

藥石新報社

社長　安東長義

大阪市西區江戸堀下通三

電話(土佐堀五〇五〇番

暑中御見舞

一般印刷
高級印刷
和洋諸帳簿

中川三陽堂印刷所

奈良市北向町二二番地

電話(奈良)一六一七番

工藤清寫眞舘

大阪市西區土佐堀船町

電話土佐堀五五五〇番

足立寫眞製版所

大阪市天王寺區伶人町五

電話天王寺五九三番

暑・中・御・伺

橋本綠雨 大阪市住吉區平野西之町八三	長崎柳秀 阪神沿線御影町字榎本	小林不浪人 青森市浦町橋本二八三	富士野鞍馬 東京市麴町區一番町四ノ三
高橋かほる 大阪市南區北炭屋町六番地 電話五九六番	中西おさむ 大阪市東成區北生野町一ノ六	朝田新水 大阪市外三郷町西橋波五六九 電話守口二五五番	姫田夕鐘 大阪市大正區小林町三六
大西八歩 大阪市東區博勞町一ノ一八 竹中方 電船場一七三一番	川柳雜誌社松山支部 酒井大樓 松山市松前町二丁目	鳥生古弗 今治市日吉通	丸尾潮花 大阪市港區八條通リ一ノ五 (竹内甚之助方)
森立名 大阪府吹田町字萬畑一四六 電話吹田二二八番	關本雅幽 大阪市住吉區 田邊本町七ノ三二	中見光路 大阪市西成區 粉濱西之町三ノ三	櫻井圓角 大阪市東區南替町松屋町 電話東五三一二番
高島玉兎朗 東京市日本橋區 蠣殼町四丁目一	谷村稔 大阪市東淀川區國次町三二	福田鶴峰 大阪市住吉區平野西之町七一	野本呑水 大阪市港區南八幡町二ノ五五

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。(係)

催

▼川柳雜誌社七月句會は七月二十四日、大軌沿線盾津の陸軍飛行場で「グライダー見學川柳會」として開催、生駒山麓を背景にした同飛行場の上空を我物顔に滑空するグライダーを見て、北支、中支の空を征覇する我が海の荒鷲を思はせた。尙當日本多大佐より航空思想に就いて有益な講話があり、次で一級滑空士小田勇氏のグライダーの實際に就いての說明があつた。(別欄記事參照)

出席者(順不同)、路郎、東魚、なつ江、新良、芳醉、南鳥、伊佐緒、ライト、豆秋、たけを、水客、綠雨、中富、潮花、變人、長谷川、葭乃、アートの諸氏。

▼有恒倶樂部有恒川柳會では定例句會を七月十九日と同二十六日に開催された。路郎主幹出席。

▼阪大川柳會は七月二十五日、天神祭と同日の夕刻より大川に映る祭提燈に示唆を感じながら開催された。路郎主幹出席。

▼松坂倶樂部趣味道場の路郎川柳講座は七月三日と七月十七日の各日曜日の正午より開講したもの不朽洞會員の丹路、豆秋、潮花、形水と仁、神樂、入仙、亞鈍の八君。川柳雜誌社からは路郎主幹、葭乃女史が出席された。

▼羊川柳句會は八月六日夕刻より高鷲亞鈍居にて開催、會する人ばかりの句會として七月二十日、石川ひさみ居に於て發會された。幹事には池田悠起、石川ひさみ兩孃が當られる事となつた。

▼川柳あざみ句會は婦人ばかりの句會として七月二十日、石川ひさみ居に於て發會された。幹事には池田悠起、石川ひさみ兩孃が當られる事となつた。

消息

▼岩崎松代君(張家口)は商用で來阪、七月三日、本社を訪ねられ、路郎主幹、葭乃女史と久方振りの歡談數日の後、歸張された。

▼和田默然人君(天津)は七月五日、木村半文錢氏の案內で本社へ立寄られ、路郎主幹と快談。「ホ、ウこれが東洋一の喫茶店ですか」と朝日ビル喫茶店を見て眼をクルリ。尙、東に向つて日本各地を巡遊せられた上、九月、再び來阪される由。

▼路郎主幹は七月二十日正午より二十四日に開催のグライダー見學川柳會下檢分の爲、大軌沿線盾津の陸軍飛行場へ行かれた

▼石崎柳石君(今治)は七月二十七日、高野山で開かれた「日本文學講莚」へ出席の爲來阪、天保山にて路郎主幹に迎へられ共に高野山へ、路郎主幹は翌朝歸阪、同君は大阪廣島を經て歸今された。

▼渡邊曉童君(今治)は義妹さんが大阪警察病院へ重患の爲入院されたので七月二十八日急擧、來阪、川・雜事務所へ寄られた手術後の經過を見屆け直ちに、歸今された。

▼路郎主幹夫妻は七月三十日夜高師濱に米本貴志子夫人を訪問され、米本氏御夫妻と十二時近くまで歡談された。

▼村松夢裡君(大阪)の令息弘道君は八月一日手術の爲阪大病院

暑・中・御・伺

へ入院されたが手術後快方に向かはれてゐられる由、一日も早く快癒せられるやうお祈りする

▼岸本水府君(大阪)は痔瘻のため加藤病院で手術された同君は既に半ば快癒せられた由、斯界のため一日も早く全快されんことを祈る。

▼橋本綠雨君(不朽洞會員)は九千尺の高峰白山へ捷戰祈願のため登山されて「室堂で寒い〳〵で寢てしまひ」の句を寄せられた。

▼水谷鮎美君(不朽洞會員)は三人のお子達が一時に病氣されてグライダー見學川柳會へ欠席されたが最早快方に向はれた由。

▼植山九天君(〇〇)より小生はハリキツてます。日中は百度以上ありますが今の處夏を越す自信がありますが、蚊のとてもひどいやつが音もたてずにやつて來てさして逃げます。

メンソレータム
蚊のさした後〳〵と支那軍の空襲ならぬ、蚊の空襲になやまされてゐるらしいお便りを頂いた。

▼高麗川柳社(仁川)より山口縣室積の磯部孔雀氏歡送小集を七月十五日開かれた由の寄せ書を頂戴した。

▼谷川曉香君(川柳人協會員)は〇月〇日名譽の應召を受け午後七時、潮花、呑水兩君に見送られて元氣一パイハリキツて〇〇へ出發された。

▼川・雜下關支部の、市多樓、半休、秋史、余志雄、比呂志、哲志、愛泉、氷川、山尾、苦樂人、諸君の寄せ書に接した。

▼川柳獨活社(福島縣白河)から和田默然人氏を迎へての寄せ書を頂戴した。默然人君の「私は大概八月末には大阪へ歸省の積りです。五花村君の白河へ御同道願ひました」三太郎君の「暑中御健闘下さい」太郎丸君の「默然人さんを迎へて愉快にすごしてゐます」等々

▼柴谷宰二郎君より水害見舞御禮のおはがきを頂いた、その中に、以前は海から此度は山から攻寄せられてこのところ支那軍と云つた形です、云々とあつた。

▼北支並びに滿洲の演藝資料視察の宮尾しげを君より新京から承德のラマ寺より離宮の山を望むとして、「百年の夢は昔のラマの寺」の句が到着した。その他、大井正夫、唯然、木耳、八翠坊、諸君の寄せ書もあつた。

▼川・雜、岡町支部より風葉、一醉、呑水、楠美、一波、水客、芳醉、伊佐緒、潮花、なつ江、雪春、諸君の寄せ書を頂いた。

慶弔

▼濱田久米雄君(廣島)の令閨は七月三十日、目出度く長女を擧げられ英子さんと命名された。御喜び申上げる。

▼藤井好文(徒歩)君は病氣療養中の所、養生相叶ず去る七月三十日午前九時二十分永眠された享年二十一、尙戒名は淨覺好文信士、御冥福を祈る。

轉居

▼富士野鞍馬君は東京市麴町區一番町四ノ三(町名番地變更)。

▼高須啞三味君は大連市伏見町七十七番地へ

▼林幹君は長野縣諏訪郡諏訪町字田宿へ

▼石井白面人君は、大阪市住吉區墨江中六丁目一番地へ

▼青木史呂君は、東京市下谷區万年町一丁目一株式會社山本武號營業所へ

改號

▼風間花盈君は奴々平。

石崎柳石
今治市城山通

川柳飜譯研究會
阿部佐保蘭
東京市小石川區初音町四
電話小石川四八四一番

須崎豆秋
住吉區旭町二丁目一四

淺田一
東京市世田谷區代田一ノ六三五

中澤濁水
高知市與力町

大橋素月
大阪市住吉區田邊東ノ町八丁目二四ノ一

松盛琴人

尼綠之助
島根縣簸川郡高松村

石田沐天
大阪市西區阿波座下通一ノ三二

川・雜下關支部
多田市多樓

川・雜名古屋支部
吉田水車
名古屋市千種區田代町堀割七八番地

川柳雜誌社
廣島支部
廣島市霞町三〇五番ノ八

高峰柳兒
長野縣須坂町

多田一波
大阪市西淀川區浦江北三丁目百十一

大阪三越川柳會
天守閣

大・鐵局
畔柳社

川柳雜誌社西條支部
荒井英賀夫
愛媛縣西條町本通

川・雜北鮮支部
三鴨美笑
朝鮮清津府錦町二三六

杉原大研子
大阪市北區萬歲町

古寺謙南坊
大阪市北區黑崎町一九

暑・中・御・伺

飛・燕 往・來

▼**蛭子省二君**（光州）朝、起きると八十八度、遂に九十三度迄昇る弱體にはこたへ何にも出來ず、貴紙着と同時に正誤丈け　他は幾日も掛つて讀みませう。

在支那の將兵を思へば暑いといふ言葉を遠慮させられる。從て暑中見舞狀も差控ゆ。編輯のお骨をり萬謝。御一家の御健安を祈りあぐ。

▼**櫻川不水君**（下關）折角上神致しましたのに毎日仕事に追はれ御伺ひする事の出來なかつたのは實に殘念でした。入渠中の德壽丸の無線工事が此度の水害で着荷が遲れたゝめ殆んど晝夜兼行で十八日迄頑張りました。十九日は未明出帆、水なき炎熱の中一週間程苦闘の連續でした目下關釜航路に就いてゐますが殘務多忙のため各方面とも不義理だらけで誠に濟まなく思つてゐます。

▼**森鷄牛子君**（大阪）御無沙汰愈々御健勝大慶に存じます。先日御端書拜受、態々退院後お越し下さいましたのに留守にて甚だ失禮仕りました。丁度騷々しいので海沿ひの兄の家にて一週間靜養しました。誠に御厚志御禮申上ます。豫後仲々思はしくなく暑いので大分弱りました。まだ病院へも行かず一ヶ月の處方箋を貰つてゐるのでまだ乘物も禁じて居ります、近日御伺致したいと存じてゐます

奥樣へもよろしくお傳へ下さい

御自愛御健闘をお祈りします。

（七月十日）

▼**塚越正光君**（東京）「川柳雜誌」七月號拜受御禮申上ます。關西地方豪雨禍にも暑熱にもお變りもないこと何よりのことゝお欣び申上げます去る十三日文藝春秋の「話」主催で川柳家の座談會がありまして三太郎、雀郎、周魚、勇魚、五花村、柿亭の諸氏と私が出席、いろ〳〵話をしましたこれは同誌九月號掲載されますまづは近況おしらせまで

▼**安川久留美君**（金澤）路郎さんの句じやないが

なにもかも裸きりの暑いことでいや禮儀もへつたくれもあつたもんじやない。去年の七月はだしぬけに貴地へ行つて御迷惑をかけたが今年は旅へ出る勇氣もなし。成る丈けひもじい目にあはぬ樣に働いてゐます。東京のしん平君から誘惑の通信あれど、動けば疲れる。

▼**今川椋影君**（愛媛縣大州町）拜啓　毎日嚴しい暑さです。先生には相變らず御壯健にて柳界の爲め御奮闘の事と存じます、私本月二日從妹の結婚の爲め伯母をつれて上阪致しました三日の式を終へて四日お伺ひゐたさうと思つたのですがひどい雨と雜用の爲めその意を得ず殘念乍ら心を殘して四日夕出發致しました。ところが途中時化ますので神戸へ上陸致しましたところ翌日が彼の大水害でしたこゝで二日滯在の止むなきに至りました。

こんな位ひなら大阪に居てゆつくりお伺も出來たのにと非常に悔みましたが引返へす故にもゆかず殘念でした歸途大洲新報社主に會ひ是非にとのことで拙文乍ら一筆ものしました別送致しますから御笑讀下さい。一時は大變なことになつたと心配致しましたが幸ひ事無きを得ましたから乍他事御安心下さい。云々（七月二十五日）

永田里十九 大阪市南區疊屋町六番地	黑川紫香 大阪府豊能郡岡町惠美須通三	平佐徹爾 兵庫縣本山村	長松兆山 寶塚ホテル
阿部閑生 豊中市千歳通二丁目	越智伽藍堂 釜山府富平町二ノ六六	澤井乃武路 兵庫縣鳴尾	田中雨月
櫻川不水	天羽鴨路 尼峰市大物町二丁目二四六	藤岡ゑげる 兵庫縣芦屋	寺井鋭々 兵庫縣芦屋
酒井美知夫 兵庫縣川邊郡稻荷村南野	勝山しゝし 石川縣小松町土居町	國方錦浦 東區石町	橋本波夢造 堺市湊
兄石手向上庵 今治市東門通二一 弟石手河鹿 高松市百間町ライオンカン内	竹中アキラ 川柳雜誌社	立川跳二 南海住吉	辻信郎

★★★ 暑・中・御・伺 ★★★

戸倉誠司
（普天）
兵庫縣川邊郡川西町鶴ノ荘

大谷五花村
東京市豐島區西巢鴨四ノ一九一

暑中御見舞
昭和十三年八月
山本雨迷
大阪市外濱寺町諏訪ノ森本通り八五
電話濱寺二一九六番

有恒川柳會
有恒倶樂部内

松坂倶樂部川柳講座有志
大阪・松坂屋百貨店内

阪大川柳會
大阪帝國大學醫學部内

★★★ 暑・中・御・伺 ★★★

池澤樂居
大阪府下高師濱

横山勝二
兵庫縣寶塚御殿山

菊川泰平樂
滿洲安奉線鳳凰城

米本貴志子

川出美根子

川柳雜誌社
御池橋支部
村松夢裡
大阪市住吉區住吉町一七二七
後藤青兒
大阪市東成區生野ヶ丘
西いわを
大阪市東成區南生野町二ノ六二

蒙彊張家口東安大街一七號
カフエー・オペラ
岩崎柳路
同松代
電話八三一番・八三二番

梅田支部
川・雜
松枝福一（靜波）
山下吉光（秀峰）
仙波文定（夕人）
酒井政雄（斗風）
皆見一男（一男）
田邊辰雄（由布）
增元定松（翠陽）
天野留藏（下居）
水谷信雄（鮎美）

鶴町支部
川柳雜誌社
岩橋双虎
加藤ライト
米谷松太樓
高橋房子
上山よしみ
松下小柳子
照屋寛柳
宮岡白峯
宮岡公子

★★★ 暑・中・御・伺 ★★★

森東魚

大島濤明
大連市西公園町川柳居平洞
自宅電話三七一三番

福田山雨樓
横濱市保土ヶ谷區
保土ヶ谷町三三三

庄万よし
南區難波新地二番丁二七

奥村丹路

佐々木三福
大連市臥龍台三六

汗に汗汗して銃後の御見舞
鳥山一歩
西宮市外甲風園第三號地五

西田艸樂
大阪市東區元伊勢町昭和園
經營日の出化學研究所

榎田竹林
柳葉女
孝坊
靜岡市寺町四丁目

川・雜今治支部
谷心
渡邊曉童府
長野文庫

春元紀太
大阪市東區放出町一九九

高鷲亞鈍
大坂形水

澤田四郎作
大阪市西成區玉出本通一丁目

中島生々庵
大阪府泉北郡諏訪ノ森

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會役員及不朽洞會員に限る。

▲各地會雜は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募集

第十五卷 第十號課題

八月廿日締切

（十句以內）

化粧　高橋かほる選

寫眞機　岩崎柳路選

第十五卷 第十一號課題

九月廿日締切

（十句以內）

屋上　橋本綠雨選

ラヂオ体操　酒井大樓選

毎號募集

近作柳樽（雜吟句）　麻生路郎選

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

★後記★

▼編輯中御伺。

▼著者の戰ひは局では著さを超越してゝ

▼特別高義一郎、川上三太郎、前田五健、淺田一、須崎豆秋、奥村丹生、村田周魚、高橋かほる、各執筆者の諸君がよく出てゐる氣の利いた銷夏記事となつたことをよろこんでゐる。

▼「川柳街雜筆」の「生蕃三題」は庄萬よし君が、大阪市參事會員として最近台灣へ視察旅行をした時の感想である。多忙な同君は惠美酒君に答へたもの、外に山本葉光君が例によつてガ

ンの編輯ページ。

▼「川柳」の「洋裝」を本號で發表した。副賞の婦人背廣服が名古屋の正穗君に當選した。何れ次號で背廣服ぞ

▼人氣を喚んだ懸賞川柳の「洋裝」を本號で發表した。副賞の婦人背廣服が名古屋の正穗君に當選した。何れ次號で背廣服ぞ

▼諸君をとう處置せられるかを豫想外に好評つてゐる

▼賞でそ川柳第二回を次號ただ

▼でも又の募集し

▼近來の戰線は學のい

▼つた取締が嚴重になつた。

▼注目されてゐる

▼國策に注意を拂つてゐる。

▼吟事に變容し、發表自由の他日を期すること

▼縣川柳袋」を設けて、一時これ

▼選ばれ

▼澤田博士から「飛彈採訪日誌」を贈られた。時間と患者に縛られた生活から、これだけの收穫を得ることは容易ではあるまい（路郎生）

社關係の人々（いろは順）

主幹

麻生路郎

贊助員

池澤樂居　長谷川一雄　大道弘徹　岡本一平　笠原路生　片岡直方　大島濤明　長野晴濱　長岡牛太郎　長崎柳秀　田中嘉納　長二純　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　頴原退藏　赤井清司　浅田一　末弘巖太郎　安川久留美　田村孝之介　谷脇素文　生方敏郎　尾亮雄　窪田銀波樓　永田里十九　奥村丹路　高橋かほる　福田山雨樓　西田岬樂　後藤青兒　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　西下小柳子　松　史風　原　江戸みつる　近藤　勇　加藤ライト　鳥生古弗　正本水客　黑川紫香　丸尾潮花　大坂形水　岩橋双虎　庄萬よし　北山梧郎　龜井晟修　函館支部（函館市）　高知支部（高知市）　梅田支部（大阪市）　田邊支部（和歌山）　川支部（島根縣）　筑尼緣之助　鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州　松山支部（松山市）　酒井大樓　御旅支部（大阪市）　江戸みつる　天王寺支部（大阪市）　妹尾變人　鶴町支部（大阪市）　宮岡白峰　御池橋支部（大阪市）　西いわを　松江支部（松江市）　勝谷山川兒　正本水客　荒井英賀夫　今里支部（大阪市）　今治支部（今治市）　光笑會（大阪市）　竹原支部（廣島縣）　十三支部（大阪市）　嘉義支部（臺灣）　兵庫支部（神戸市）　廣島支部（廣島市）　名古屋支部（名古屋市）　岡町支部（豐中市）　下關支部（下關市）　北鮮支部（清津府）　大鐵局支部（大阪市）　西條支部（愛媛縣）　函館支部（函館市）　高知支部（高知市）　國澤春水　水谷鮎美　左馬　永田里十九　松井可笑　淺野牧人　宮內耕朗　三崎陽幸　福岡葉留路　吉田水車　丸尾潮花　多田市多樓　三鴨美笑

社務一切（編輯・通信・購讀・廣告其他）の用件は本社宛に願ひます。

本社を左記へ移しました

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地昭和ビル二〇一號室

川柳雜誌社

電話土佐堀（三三三三）六三四四番

振替大阪七五〇五〇番

支部と幹事

定價

一部　金三十錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十三年八月一〇日印刷
昭和十三年八月十五日發行

第十五卷　第八號
（毎月一回十五日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
本社　川柳雜誌社
電話土佐堀（三三三三）六三番
振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

支社　東京市蒲田町女塚町二丁目二二ノ一　川柳雜誌社東京支社

實費頒布書店

（大阪）參文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市內各書店（東京）かん東京堂　ばん巖松堂　ばん吉岡書店
あさ玉森堂　ばん紀伊國屋　ばん三昧堂（神戸）米田寶文館（函館）
石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
昭和十三年一月十日印刷納本　昭和十三年八月十五日發行

時代が生んだ

素晴らしい洗濯劑

スフデンの特徴

▼十分か二十分浸し絞つて水洗ひすれば綺麗になります
▼海水、溫泉でも眞水同樣使へます
▼臭ひは少しもつきません
白い物は白いまゝ染めた物は綺麗な色合はいつまでも保つてゐます
▼毛織、スフ織物は洗ひ縮みせずふんわり仕上ります
▼生地は絶對に傷めませんし、手もひぶもあれません

★

これほど目に見えてよいスフデンでも御値段が高くてはお薦め致しかねますが
石鹸よりも安い
のですからきつとお氣に召すこと、信じます。
論より證據、ぜひ一度お試し下さいませ！

毛織
スフ織
絹織　綿織

約三百瓦入一箱金參拾錢・二倍大一箱金五十錢

使用法

普通（一斗入）のバケツの半分の水にスフデンを茶匙五—七杯に溶かし、其液中で洗濯致します

特に御婦人や殿方の
頭髮洗に最適

★

製造元　東京　ミヨシ化學興業株式會社
高橋盛大堂
大阪市東區博勞町四丁目心齋橋筋

發賣元
日本化學製品株式會社
大阪市西區江戸堀上通二
電話土八一六三・八一六四・三三三三

川柳雜誌　NO・175　定價金30錢　送料壹錢